

— 1985年 —

全国盲学校及び小・中学校弱視学級 児童生徒の視覚障害原因等調査結果 報告書

- I 全国盲学校児童生徒の視覚障害原因とその推移
- II 全国小・中学校弱視学級児童生徒の視覚障害原因
- III 全国盲学校児童生徒の重複障害の実態
- IV 視覚障害と使用文字との関係

調査実施機関

筑波大学学校教育部心身障害教育研究分野

調査責任者

大川原 潔

調査実施機関及び担当者

大川原	潔	筑波大学教授	学校教育部
藤田	千代	筑波大学助手	学校教育部
遠藤	勉	筑波大学学校教育部	研究生
斉藤	元秀	筑波大学学校教育部	研究生

調査協力関係者（五十音順）

植村	恭夫	慶応義塾大学教授	医学部
大山	信郎	東京教育大学	名誉教授
海藤	弘	全日本盲学校教育	研究会長
香川	邦生	文部省初等中等教育局	特殊教育課教科調査官
久保田	伸枝	帝京大学教授	医学部
湖崎	克	大阪市立小児保健センター	所長
佐藤	恒	全国盲学校長	会長
谷村	裕	筑波大学教授	心身障害学系
田辺	歌子	順天堂大学医学部	眼科学教室
中島	章	順天堂大学教授	医学部
原田	政美	東京都心身障害者福祉センター	所長・帝京大学教授
藤木	慶子	順天堂大学医学部	眼科学教室
丸尾	敏夫	帝京大学教授	医学部

（本報告書のうち「I 全国盲学校児童生徒の視覚障害原因とその推移」は、筑波大学学校教育部紀要第8巻に掲載したものである。）

調 査 の 趣 旨

視覚障害者に対する教育や福祉の改善・充実を図り、あるいは失明予防等の対策を講ずる上で最も必要なことは、視覚障害者の実態とその動向をあらゆる面での確に把握することである。特に、その中でも視覚障害原因等に関する統計を年次を追って定期的に調査研究して、その推移と変化の実態を比較分析することが重要である。

視覚障害原因は、医療や生活環境その他の諸要因の影響を受けて、近年著しく変化する傾向にある。そこで、当研究室においては東京教育大学当時の昭和45年（1970年）以降5年毎に、全国盲学校児童生徒の視覚障害原因等調査を実施してその実態を検討している。今回の調査はその第4回目に当たっている。現在この種の全国的な調査としては本調査が唯一のものであるが、従前のものとしては、戦前東京盲学校が実施した1910～1929年調査と、戦後は日本眼衛生協会や順天堂大学医学部眼科学教室等が実施した1952年、1954年、1959年及び1964年の調査がある。従って、当研究室における調査もこれら諸調査の実績を踏まえ、その関連において実施しているものである。

また、1980年調査からは、盲学校のほか、全国小・中学校弱視学級児童生徒を調査対象に加えるとともに、重複障害の実態等についても明らかにし、この面における諸施策の推進に資している。

最後に、今回の調査実施に際しては、前回同様全国すべての盲学校と弱視学級を置く小・中学校のご協力を得て100%の調査資料を回収することができた。また、全国盲学校長会では当該総会において、この調査が完全に実施できるよう決議されたし、別記調査協力者をはじめ多くの方々からご協力いただいた。特に、調査票の分類・集計に当たっては、順天堂大学医学部眼科学教室で分担していただいた。これらの関係各位に対し、深甚の謝意を表すものである。そして、この貴重な資料が各方面で活用されることを切に希望して止まない。

昭和61年3月30日

調査責任者
筑波大学学校教育部
教授 大川原 潔

目 次

I	全国盲学校児童生徒の視覚障害原因とその推移	1
1	調査目的及び方法	1
2	調査結果	1
(1)	盲学校在学者の年齢分布等の実態	1
(2)	盲学校在学者の視覚障害原因及び眼疾患の部位と症状	4
(3)	盲学校在学者の視覚障害発症年齢	18
(4)	盲学校在学者の視力	18
3	考 察	20
	参考文献	22
II	全国小・中学校弱視学級児童生徒の視覚障害原因	23
1	調査目的及び方法	23
2	調査結果	23
(1)	視覚障害原因と眼疾患の部位と症状	23
(2)	弱視学級児童生徒の視力	29
3	考 察	29
III	全国盲学校児童生徒の重複障害の実態	31
1	調査目的及び方法	31
2	調査結果	31
(1)	年齢別及び地区別重複障害児の実態	31
(2)	視覚障害と合併する他の障害の種類	31
(3)	重複障害児の視覚障害原因及び眼疾患の部位と症状	33
(4)	重複障害児の視力及び視力と使用文字	33
3	考 察	36
IV	視覚障害と使用文字との関係	37
1	まえがき	37
2	調査の方法及び結果	37
(1)	盲学校在学者の視力とその分布状態	38
(2)	視力と使用文字との関係	39
3	考 察	44
	付 録	47

I 全国盲学校児童生徒の視覚障害原因とその推移

— 1985年・全国実態調査を中心に —

大川原 潔	藤 田 千 代	遠 藤 勉	斎 藤 元 秀
谷 村 裕	植 村 恭 夫	大 山 信 郎	海 藤 弘
香 川 邦 生	久保田 伸 枝	湖 崎 克	佐 藤 恒
田 辺 歌 子	中 島 章	原 田 政 美	藤 木 慶 子
丸 尾 敏 夫			

1 調査目的及び方法

この調査は、全国の各盲学校に在学する全幼児・児童・生徒（以下児童生徒という。）の視覚障害原因、眼疾患の部位と症状、発症年齢、視力及び視力と使用文字との関係並びに重複障害の実態等を明らかにして、今後における視覚障害教育の改善に資し、また、国際的に関連する失明予防に関する基礎資料の収集に協力することを目的に実施したものである。

本稿においては上記調査内容のうち、主として視覚障害原因、眼疾患の部位と症状、発症年齢及び視力の実態を報告し、視力と使用文字との関係及び重複障害の実態についてはそれぞれ別稿において報告する。また、本調査と同時に実施した全国小・中学校弱視学級児童生徒の視覚障害原因等調査の結果についても、別途報告の予定である。

次に、今回の調査は昭和60年度（1985年）において全国72（分校2を含む）の全盲学校（国立1，公立69 — 分校2を含む — ，私立2）に在学しているすべての児童生徒を対象に、Fig. 1の「視覚障害原因等調査票」を各盲学校長あてに送付し、同年7月1日現在で記入を依頼した。また、全国盲学校長会では従前の例に従って、今回も同会総会において、本調査の完全を期するため各校が全面的に協力することが決議された。

なお、わが国における全国盲学校児童生徒の視覚障害原因調査は、1952年以降各種の機関によってほぼ5年毎に実施されてきたが、1970年及び1975年調査は東京教育大学教育学部リハビリテーション教育研究施設が、また、

1980年及び今回の調査は、この組織を継承した筑波大学学校教育部心身障害教育研究分野が実施した。なお、今回の調査においては、学外からも関係者の協力を得たほか、特に、調査票の分類・集計に当たっては一部順天堂大学医学部眼科学教室の協力を得た。

2 調査結果

調査票の回収成績は学校数にして72校（100%）、調査票総数にして6,687人分である。同年5月1日現在の学校基本調査による全国盲学校の在学者総数では6,785人、また、全国盲学校長会の調査（昭和60年度全国盲学校職員録）では同6,780人となっており、回収総数との間にそれぞれ若干の差異が見られるが、その後における転退学、長期欠席または未登校や在宅児訪問指導等の事情を勘案すれば、ほぼ現実に近い実数が得られたものと思われる。

なお、回収した調査票のうち某校の幼稚部に属する20枚については、視力その他の記載状況からみて妥当でないと思われたので、これを集計対象から除外することとした。従って、以下調査結果の分析に当たっては6,667人を対象にしたものである。

（1）盲学校在学者の年齢分布等の実態

今回集計の対象となった6,667人の幼稚部、小学部、中学部及び高等部在学者の年齢を7つの年齢群に分けてその分布状態を見ると Table 1 のとおりである。このうち幼稚部、小学部及び中学部の在学者はほぼ標準的な

視覚障害原因等調査票

学 校 名			在籍の部	幼 小 中 高 専		
氏 名 又は 整理番号			性 別	男	満 年 齢	障 害 発 生 年 齢
				女	歳	歳
視 力	裸眼視力	矯正視力	不 明	使 用 文 字	点 字	
	右				普通文字	
	左				両 用 (主に点字・主に普通文字)	
	両眼				そ の 他 ()	
重 複 障 害 の あ る 場 合			知 能 肢 体 聾 難 聴 言 語 そ の 他 ()			
視 覚 障 害 原 因 (下記 A項の番号)		番 号 () そ の 他 ()				
眼 疾 患 の 部 位 と 症 状 (下記 B項の番号)		番 号 () そ の 他 ()				

A 視 覚 障 害 原 因

- | | | |
|---------|-------|-----------|
| 1 麻 疹 | 4 外 傷 | 7 栄 養 障 害 |
| 2 梅 毒 | 5 中 毒 | 8 先 天 素 因 |
| 3 脳 膜 炎 | 6 腫 瘍 | 9 原 因 不 明 |

B 眼 疾 患 の 部 位 と 症 状

眼 球 全 体

- 1 緑 内 障
- 2 水 (牛) 眼
- 3 小眼球 (葡萄膜欠損を含む)
- 4 無眼球 (摘出手術以外のもの)
- 5 無 虹 彩
- 6 虹 彩 欠 損
- 7 水晶体欠損 (摘出手術以外のもの)
- 8 視 神 経 欠 損
- 9 屈 折 異 常
- 10 眼 球 癆
- 11 白 子
- 12 眼 球 振 と う
- 13 全 色 盲

角 膜 疾 患

- 14 角 膜 軟 化 症
- 15 角 膜 白 斑

水 晶 体 疾 患

- 16 白内障 (摘出手術をしたものを含む)
- 17 水晶体亜脱臼

硝 子 体 疾 患

- 18 硝子体疾患

葡 萄 膜 疾 患

- 19 葡萄膜疾患

網 脈 絡 膜 疾 患

- 20 網膜色素変性症
- 21 黄斑部変性症
- 22 網脈絡膜萎縮症
- 23 未熟児網膜症
- 24 網膜芽細胞腫
- 25 網 膜 剝 離

視 束 視 路 疾 患

- 26 視 神 経 萎 縮
- 27 視 神 経 炎
- 28 視 中 枢 障 害

記 入 上 の 注 意

1. 該当するものに○印をつけ、空欄には必要事項を記入して下さい。
2. 満年齢は7月1日現在で記入して下さい。
3. 視覚障害原因と眼疾患の部位と症状の欄については上記の各項より選びその番号を記入して下さい。
該当項が無い場合には「その他」の欄になるべく内容を具体的に記入して下さい。例えば(ペーチェット)等。

返 送 先 〒 112 東京都文京区大塚 3-29-1 筑波大学学校教育課 大川原研究室

Fig. 1 視覚障害原因等調査票 (1985年)

Table 1 盲学校児童生徒の年齢群別分布

年齢群	人数	百分率 (%)
3～5	144	2.2
6～12	1,567	23.5
13～15	1,226	18.4
16～18	1,392	20.9
19～21	976	14.6
22～30	533	8.0
31以上	822	12.3
不明	7	0.1
合計	6,667	100.0

年齢であるのに対し、高等部（別科、専攻科を含む。）にあっては、中途失明等によって入学してくる者が多いために、かなりの高年齢者が在学している。22歳～30歳が全体の8.0%に当たる533人、31歳以上が同12.3%の822人となっている。この中には60歳以上が4人も在学しており、最高年齢は68歳である。盲学校在学者の年齢分布の推移を見ると Table 2 のとおりで、高年齢者の占める比率が上昇の傾向にある。

また、一方、在学者数は全体的に近年減少傾向が見られるが、小・中学部においては特にこれが顕著である。例えば、学校基本調査によると昭和40年度の全国盲学校の在学者総数は9,933人、うち小・中学部5,348人、高等部4,561人であったのが、20年後の昭和60年度においては、同総数6,785人、うち小・中学部2,477人、高等部4,124人に減少している。このように両者を比較すると昭和60年度は20年前に比して全体で3,148人減の68%に、

Table 2 盲学校児童生徒の年齢分布の推移

1954年 (7,032人)			1970年 (8,873人)			1975年 (8,464人)			1980年 (7,799人)			1985年 (6,667人)		
年齢	人数	%												
～10	1,020	14.5	4～9	1,061	12.0	4～9	1,238	14.6	3～5	152	2.0	3～5	144	2.2
11～20	4,383	62.3	10～14	2,406	27.2	10～14	2,013	23.8	6～12	2,142	27.5	6～12	1,567	23.5
21～30	1,242	17.7	15～19	3,627	40.8	15～19	2,887	34.1	13～15	1,221	15.6	13～15	1,226	18.4
31以上	236	3.4	20～29	1,322	14.9	20～29	1,477	17.5	16～18	1,463	18.8	16～18	1,392	20.9
不明	151	2.1	30以上	457	5.1	30以上	772	9.1	19～21	1,196	15.3	19～21	976	14.6
						不明	77	0.9	22～30	814	10.4	22～30	533	8.0
									31以上	792	10.2	31以上	822	12.3
									不明	19	0.2	不明	7	0.1

Table 3 盲学校児童生徒の年齢群別重複障害者

年齢	年度	調査対象数	重複障害児数	百分率 (%)
6～12	1980年	2,142	643	30.0
	1985年	1,567	561	35.8
13～15	1980年	1,221	250	20.5
	1985年	1,226	347	28.3
16～18	1980年	1,463	178	12.2
	1985年	1,392	265	19.0

Table 4 盲学校児童生徒の性別比の推移

調査年	1954年	1959年	1964年	1970年	1975年	1980年	1985年
人数							
男	4,357	5,257	5,817	5,246	5,103	4,866	4,195
女	2,675	3,429	4,118	3,650	3,178	2,773	2,305
女1対男	1.61	1.53	1.41	1.44	1.61	1.75	1.82

注) 調査票における性別不明を除く。

小・中学部では2,871人減で46%に激減しているのである。(高等部は90%)

更に、盲学校在学者の中に重複障害者が多くなってきていることも見逃せない現象である。1980年調査では重複障害者は全在学者の16.8%であったのに対し、今回の調査では20.6%となっている。小・中・高等部に対応する標準的年齢群における重複障害者の数と割合を両調査において比較すると Table 3 のとおりある。

また、盲学校在学者の男女の割合であるが、Table 4 に示すとおり1970年調査においては女1に対して男1.44、1975年調査では同1.61、1980年調査では同1.75であったのが、今回の調査では同1.82というように女子に比して男子の在学率が顕著に増加してきている。

以上、最近の盲学校在学者の実態は、高年齢者の増加と低年齢者の減少に加えて、重複障害者も次第に増加する傾向にある。このことは当然のことながら、以下に記す盲学校在学者の視覚障害原因等調査結果に見る諸統計を解釈する上で重要な意味を持つものである。

(2) 盲学校在学者の視覚障害原因及び眼疾患の部位と症状

盲学校在学の全対象者の視覚障害の原因別と眼疾患の部位と症状による相関分類は Table 5 のとおりである。また、更にそれを年齢群別に分類して比較したものが Table 6 の1～8である。

視覚障害を原因別に見ると、盲学校全体としては次のとおりである。(Fig. 2 参照)

伝染性疾患	1.2%
外 傷	3.3%
中 毒	13.7%
腫 瘍	5.5%
全 身 病	4.4%
先 天 素 因	60.5%
原因不明	10.8%
無 記 入	0.5%

また、1910年以降約75年間における盲学校在学者の視覚障害原因の推移を示すと Table 7 のとおりである。伝染性疾患が急激に減少した反面、中毒や先天素因の上昇傾向が特徴的である。また、今年度調査の視覚障害原因を年齢群別に分類して比較すると Table 8 のとおりである。中毒、腫瘍は低年齢群ほど高率を示していることが注目される。

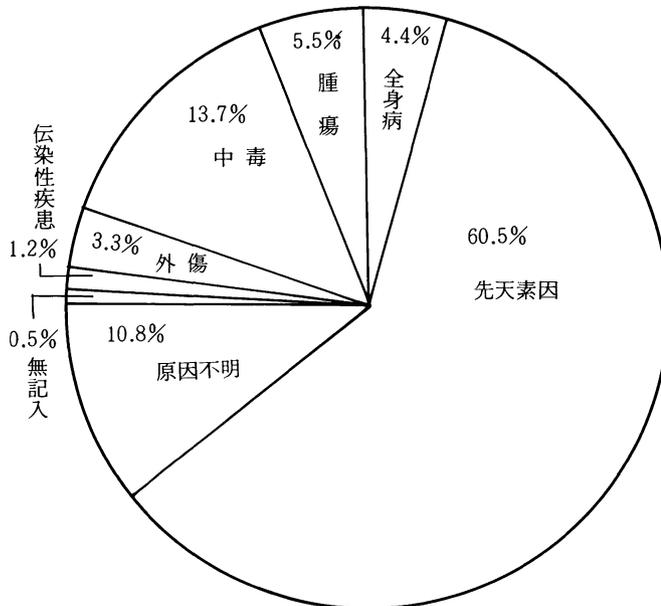


Fig. 2 盲学校児童生徒の視覚障害原因別分類

Table 5 盲学校児童生徒の視覚障害原因（全体）

視覚障害原因 眼疾患の部位と症状	伝染性疾患				外傷	中毒	腫瘍	全身病				先天素因	原因不明	無記入	合計	百分率%
	麻疹	梅毒	脳膜炎	その他				栄養障害	ベーチェット病	糖尿病	その他					
眼球全体	7		3	9	37	9	13	5	3		7	1662	207	5	1967	29.5
緑内障	2			3	3	4	1		2		4	181	46		246	3.7
水（牛）眼				1								187	13		201	3.0
小眼球												391			391	5.9
無眼球	1				2		1					72	11	1	88	1.3
無虹彩												58	4	1	63	0.9
虹彩欠損												41	4		45	0.7
屈折異常			2		10		2				1	353	55		423	6.3
眼球瘍	4			4	16	5	3	4	1		1	76	20	1	135	2.0
白子												105			105	1.6
眼球振盪			1	1	3		2					144	40	1	192	2.9
その他					3		4	1			1	54	14	1	78	1.2
角膜疾患	8	2		5	18	5		5			7	144	36	2	232	3.5
角膜軟化症	2			2				3			2	3	2		14	0.2
角膜白斑	5	1		2	13	3		1			3	95	27	2	152	2.3
その他	1	1		1	5	2		1			2	46	7		66	1.0
水晶体疾患	2		2	2	18	3	2	4	2	3		787	95	9	929	13.9
白内障	2		2	2	18	3	2	4	2	3		733	82	8	861	12.9
水晶体欠損												22	9		31	0.5
水晶体亜脱臼												32	4	1	37	0.6
硝子体疾患			1		3			1	1		1	29	4	1	41	0.6
ブドウ膜疾患			1			1			81	1	2	21	28		135	2.0
網脈絡膜疾患	1			1	45	897	195	4	4	89	4	1019	140	2	2383	35.7
網膜色素変性症												651			651	9.8
黄斑部変性症					1	1		3	1		3	112	21		142	2.1
網脈絡膜萎縮症					6	1			3			117	45	1	173	2.6
未熟児網膜症							876								876	13.1
糖尿病網膜症										89					89	1.3
網膜芽細胞腫							191								191	2.9
網膜はく離					33	1		1				79	50		164	2.5
全色盲												17			17	0.3
その他	1			1	5		4				1	43	24	1	80	1.2
視束視路疾患	4		32	4	96	19	158	2	1	2	60	350	190	1	922	13.8
視神経萎縮	4		29	4	87	15	150	2	1	2	50	309	163	3	819	12.3
視神経欠損					2		3					15	3		23	0.3
視神経炎					1	2					1	9	12		25	0.4
視中枢障害			3		6	2	5				9	17	12	1	55	0.8
無記入または不明	1			1	4	1	4					22	18	7	58	0.9
合計	23	2	38	23	221	916	369	21	92	95	85	4034	718	30	6667	100
百分率%	0.3	0.03	0.6	0.3	3.3	13.7	5.5	0.3	1.4	1.4	1.3	60.5	10.8	0.5	100	

注) 無水晶体は白内障を含む。

Table 6-1 盲学校児童生徒の視覚障害原因（3～5歳）

視覚障害原因 眼疾患の 部位と症状	伝染性疾患				外傷	中毒	腫瘍	全身病				先天素因	原因不明	無記入	合計	百分率 %
	麻疹	梅毒	脳膜炎	その他				栄養障害	ベータエレット病	糖尿病	その他					
眼球全体																
緑内障											5	2			7	4.9
水（牛）眼											4				4	2.8
小眼球											12				12	8.2
無虹彩											3				3	2.1
無虹彩欠損											3				3	2.1
屈折異常											3	1			4	2.8
眼球癆											1				1	0.7
白子											2				2	1.4
眼振																
その他											1				1	0.7
角膜疾患																
角膜軟化症																
角膜白斑					1							1			2	1.4
その他											4				4	2.8
水晶体疾患																
白内障							1				9				10	6.9
水晶体欠損																
水晶体亜脱臼																
硝子体疾患											6				6	4.2
ブドウ膜疾患																
網脈絡膜疾患																
網膜色素変性症											3	1			4	2.8
黄班部変性症																
網脈絡膜萎縮症											1				1	0.7
未熟児網膜症						31									31	21.5
糖尿病網膜症																
網膜芽細胞腫								7							7	4.9
網膜はく離											3				3	2.1
全色盲																
その他											1	2			3	2.1
視束視路疾患																
視神経萎縮			4		4		2				1	7	3		21	14.6
視神経欠損											2				2	1.4
視神経炎											1	1			2	1.4
視中枢障害			1				1				1	3	3		9	6.3
無記入または不明					1						1				2	1.4
合計			5		6	31	11				3	74	14		144	100.0
百分率 %			3.5		4.2	21.5	7.6				2.1	51.4	9.7		100.0	

注) 無水晶体は白内障を含む。

Table 6-2 盲学校児童生徒の視覚障害原因（6～12歳）

視覚障害原因 眼疾患の 部位と症状	伝染性疾患				外 傷	中 毒	腫 瘍	全身病				先 天 素 因	原 因 不 明	無 記 入	合 計	百 分 率 %
	麻 疹	梅 毒	脳 膜 炎	そ の 他				栄 養 障 害	ペ ー チ エ ッ ト 病	糖 尿 病	そ の 他					
眼 球 全 体																
緑 内 障						1				1	42	6			50	3.2
水 (牛) 眼											52	2			54	3.4
小 眼 球											126				126	8.0
無 眼 球											20	4			24	1.5
無 虹 彩											17	2	1	20	1.3	
虹 彩 欠 損											8	1		9	0.6	
屈 折 異 常			2								55	5		62	4.0	
眼 球 癆	1			2			1	1			12	3		20	1.3	
白 子											24			24	1.5	
眼 振								2			33	11		46	2.9	
そ の 他								2			9	4		15	1.0	
角 膜 疾 患																
角 膜 軟 化 症									1		1				3	0.2
角 膜 白 斑											33	5	1	39	2.5	
そ の 他	1										13	2		16	1.0	
水 晶 体 疾 患																
白 内 障						1		1			208	13	1	224	14.3	
水 晶 体 欠 損											8	2		10	0.6	
水 晶 体 亜 脱 臼											6	1		7	0.4	
硝 子 体 疾 患			1								16	1	1	19	1.2	
ブドウ膜疾患											7	7		14	0.9	
網脈絡膜疾患																
網膜色素変性症											61			61	3.9	
黄斑部変性症											12	2		14	0.9	
網脈絡膜萎縮症											16	7	1	24	1.5	
未熟児網膜症						299								299	19.1	
糖尿病網膜症																
網膜芽細胞腫								97						97	6.2	
網膜はく離					3						15	6		24	1.5	
全 色 盲											3			3	0.2	
そ の 他								2		1	10	4		17	1.1	
視 束 視 路 疾 患																
視 神 経 萎 縮	3		13		16	3	40			9	76	31		191	12.2	
視 神 経 欠 損					1		3				8	2		14	0.9	
視 神 経 炎										1	3	1		5	0.3	
視 中 枢 障 害			1							7	4	7		19	1.2	
無記入または不明	1			1	1					1	5	7	1	17	1.1	
合 計	6		17	3	21	304	147	3		21	903	136	6	1567	100.0	
百 分 率 %	0.4		1.1	0.2	1.3	19.4	9.4	0.2		1.3	57.6	8.7	0.4	100.0		

注) 無水晶体は白内障を含む。

Table 6-3 盲学校児童生徒の視覚障害原因（13～15歳）

視覚障害原因 眼疾患の 部位と症状	伝染性疾患				外 傷	中 毒	腫 瘍	全身病				先 天 素 因	原 因 不 明	無 記 入	合 計	百 分 率 %
	麻 疹	梅 毒	脳 膜 炎	そ の 他				栄 養 障 害	ベ ー チ エ ット 病	糖 尿 病	そ の 他					
眼 球 全 体																
緑 内 障												38	4		42	3.4
水 (牛) 眼												49	2		51	4.2
小 眼 球												78			78	6.4
無 眼 球	1											17	2		20	1.6
無 虹 彩												16			16	1.3
虹 彩 欠 損												5	1		6	0.5
屈 折 異 常					1		1					43	10		55	4.5
眼 球 癆	1			1			1	1				16	1		21	1.7
白 子												24			24	2.0
眼 振					1							23	9	1	34	2.8
そ の 他					1							14	6		22	1.8
角 膜 疾 患																
角 膜 軟 化 症	2							1					1		4	0.3
角 膜 白 斑	2					1		1				21	5		30	2.4
そ の 他						1		1			1	3	1		7	0.6
水 晶 体 疾 患																
白 内 障			1		2			1				151	12		167	13.6
水 晶 体 欠 損												5			5	0.4
水 晶 体 亜 脱 臼												3	2		5	0.4
硝 子 体 疾 患												3			3	0.2
ブドウ膜疾患												3	2		5	0.4
網脈絡膜疾患																
網膜色素変性症												76			76	6.2
黄班部変性症												17	4		21	1.7
網脈絡膜萎縮症												16	6		22	1.8
未熟児網膜症						272									272	22.2
糖尿病網膜症																
網膜芽細胞腫								40							40	3.3
網膜はく離					2			1				13	8		24	2.0
全 色 盲												3	1		4	0.3
そ の 他					1			1				8	5		15	1.2
視 束 視 路 疾 患																
視 神 経 萎 縮			1	2	7	3	29		1	18	53	19			133	10.8
視 神 経 欠 損												1			1	0.1
視 神 経 炎												1			1	0.1
視 中 枢 障 害					1	1	2				1	5			10	0.8
無記入または不明												8	3	1	12	1.0
合 計	6		2	3	16	278	74	6		1	21	713	104	2	1226	100.0
百 分 率 %	0.5		0.2	0.2	1.3	22.7	6.0	0.5		0.1	1.7	58.2	8.5	0.2	100.0	

注) 無水晶体は白内障を含む。

Table 6-4 盲学校児童生徒の視覚障害原因（16～18歳）

視覚障害原因 眼疾患の 部位と症状	伝染性疾患				外傷	中毒	腫瘍	全身病				先天素因	原因不明	無記入	合計	百分率%
	麻疹	梅毒	脳膜炎	その他				栄養障害	ベーチェット病	糖尿病	その他					
眼球全体																
緑内障	2				1	1					1	35	4		44	3.2
水（牛）眼				1								33	5		39	2.8
小眼球												86			86	6.2
無眼球							1					13	1		15	1.1
無虹彩												16	1		17	1.2
虹彩欠損												13			13	0.9
屈折異常					1							78	17		96	6.9
眼球癆	1			1	1	4		1				19	5	1	33	2.4
白子												24			24	1.7
眼振												37	13		50	3.6
その他												18	1		19	1.4
角膜疾患																
角膜軟化症				1				1				1			3	0.2
角膜白斑	2				2						1	19	3		27	1.9
その他												8	3		11	0.8
水晶体疾患																
白内障	1				2	1		1				182	23	6	216	15.5
水晶体欠損												5	3		8	0.6
水晶体亜脱臼												8			8	0.6
硝子体疾患					1							2	2		5	0.4
ブドウ膜疾患						1			2			5	2		10	0.7
網脈絡膜疾患																
網脈色素変性症												107			107	7.7
黄班部変性症												28	4		32	2.3
網脈絡膜萎縮症												31	8		39	2.8
未熟児網膜症						197									197	14.2
糖尿病網膜症										1					1	0.1
網膜芽細胞腫							31								31	2.2
網膜はく離					4							17	7		28	2.0
全色盲												3			3	0.2
その他				1			1			1	10	2			15	
視束視路疾患																
視神経萎縮			5		19	4	31	1	1	1	9	81	40	3	195	1.1
視神経欠損												2			2	0.1
視神経炎												1	4		5	0.4
視中枢障害			1		2							2			5	0.4
無記入または不明							1					2	3	2	8	0.6
合計	6		6	4	33	208	65	4	3	2	12	886	151	12	1392	100.0
百分率%	0.4		0.4	0.3	2.4	14.9	4.7	0.3	0.2	0.1	0.9	63.6	10.8	0.9	100.0	

注) 無水晶体は白内障に含む。

Table 6-5 盲学校児童生徒の視覚障害原因（19～21歳）

視覚障害原因 眼疾患の 部位と症状	伝染性疾患				外 傷	中 毒	腫 瘍	全身病				先 天 素 因	原 因 不 明	無 記 入	合 計	百 分 率 %
	麻 疹	梅 毒	脳 膜 炎	そ の 他				栄 養 障 害	ベ ー チ エ ット 病	糖 尿 病	そ の 他					
眼 球 全 体																
緑 内 障				1		1						34	6		42	4.3
水 (牛) 眼												33	2		35	3.6
小 眼 球												54			54	5.5
無 眼 球												16	2		18	1.8
無 虹 彩												5	1		6	0.6
虹 彩 欠 損												10	1		11	1.1
屈 折 異 常					5		1				1	89	5		101	10.3
眼 球 癆					5		1	1	1		1	16	3		28	2.9
白 子												22			22	2.3
眼 振			1	1								34	4		40	4.1
そ の 他					1							7	1		9	0.9
角 膜 疾 患																
角 膜 軟 化 症																
角 膜 白 斑				1	2	1						12	1		17	1.7
そ の 他					3			1				9			13	1.3
水 晶 体 疾 患																
白 内 障			1	2	4	1						111	12		131	13.4
水 晶 体 欠 損												2			2	0.2
水 晶 体 亜 脱 臼												12	1		13	1.3
硝 子 体 疾 患												1			1	0.1
ブドウ膜疾患									4			2	2		8	0.8
網脈絡膜疾患																
網膜色素変性症												110			110	11.2
黄斑部変性症					1			2			1	26	2		32	3.3
網脈絡膜萎縮症						1						26	3		30	3.1
未熟児網膜症						65									65	6.7
糖尿病網膜症										1					1	0.1
網膜芽細胞腫							12								12	1.2
網膜はく離					8	1						14	10		33	3.4
全 色 盲												3			3	0.3
そ の 他	1											8	2		11	1.2
視 束 視 路 疾 患																
視 神 經 萎 縮			3		12	2	23				4	36	26		106	10.9
視 神 經 欠 損					1							2			3	0.3
視 神 經 炎										1		1	1		3	0.3
視 中 枢 障 害					1	1					1	1			4	0.4
無記入または不明					1							4	5	2	12	1.2
合 計	1		5	5	45	73	37	4	5	2	8	699	90	2	976	100.0
百 分 率 %	0.1		0.5	0.5	4.6	7.5	3.8	0.4	0.5	0.2	0.8	71.6	9.2	0.2	100.0	

注) 無水晶体は白内障に含む。

Table 6-6 盲学校児童生徒の視覚障害原因（22～30歳）

視覚障害原因 眼疾患の部位と症状	伝染性疾患				外傷	中毒	腫瘍	全身病				先天素因	原因不明	無記入	合計	百分率%
	麻疹	梅毒	脳膜炎	その他				栄養障害	ベーチェット病	糖尿病	その他					
眼球全体																
緑内障					1						11	6			18	3.4
水（牛）眼											11	2			13	2.4
小眼球											11				11	2.1
無虹彩					2						3				5	0.9
虹彩欠損											1				1	0.2
屈折異常						2					45	7			54	10.1
眼球癆					7	1					2	1			11	2.1
白子眼											8				8	1.5
眼振					1						12	2			15	2.8
その他							1				3	1			5	0.9
角膜疾患																
角膜軟化症																
角膜白斑				1	4						3	6	3		17	3.2
その他					1						4	1			6	1.1
水晶体疾患																
白内障	1				5				1		42	4	1		54	10.1
水晶体欠損											1				1	0.2
水晶体亜脱臼											1				1	0.2
硝子体疾患					1						1				2	0.4
ブドウ膜疾患			1						21	2	2	3	7		36	6.8
網脈絡膜疾患																
網膜色素変性症											84				84	15.8
黄斑部変性症									1		1	10	2		14	2.6
網脈絡膜萎縮症					1				1		13	5			20	3.8
未熟児網膜症						11									11	2.1
糖尿病網膜症										14					14	2.6
網膜芽細胞腫							1								1	0.2
網膜はく離					7						7	7			21	3.9
全色盲											1				1	0.2
その他					1						1	1	2		5	0.9
視束視路疾患																
視神経萎縮			2		14	3	20	1			6	28	11		85	15.9
視神経欠損																
視神経炎						1							1		2	0.4
視中枢障害							1							1	2	0.4
無記入または不明											2				2	0.4
合計	1		2	2	46	17	23	2	22	17	13	324	62	2	533	100.0
百分率%	0.2		0.4	0.4	8.6	3.2	4.3	0.4	4.1	3.2	2.4	60.8	11.6	0.4	100.0	

注）無水晶体は白内障を含む。

Table 6-7 盲学校児童生徒の視覚障害原因（31歳以上）

視覚障害原因 眼疾患の部位と症状	伝染性疾患				外傷	中毒	腫瘍	全身病				先天素因	原因不明	無記入	合計	百分率%
	麻疹	梅毒	脳膜炎	その他				栄養障害	ベーチェット病	糖尿病	その他					
眼球全体																
緑内障				2	1		1		2		2	16	17		41	5.0
水（牛）眼					1							4			5	0.6
小眼球												15			15	1.8
無眼球													2	1	3	0.4
無虹彩																
虹彩欠損											1	1			2	0.2
屈折異常					1						43	10			54	6.6
眼球癆	1				3						7	7			18	2.2
白子											1				1	0.1
眼振						1					6				7	0.9
その他		1			1		1				1	1	1	1	6	0.7
角膜疾患																
角膜軟化症											1	1			2	0.2
角膜白斑	1	1		1	3	1					4	9	1		21	2.6
その他				1	2	1					1	5			10	1.2
水晶体疾患																
白内障					4		1	1	2	2	30	18			58	7.1
水晶体欠損					1							4			5	0.6
水晶体亜脱臼											2			1	3	0.4
硝子体疾患					1			1	1	1	1	1			6	0.7
ブドウ膜疾患									54			1	8		63	7.7
網脈絡膜疾患																
網膜色素変性症											212				212	25.8
黄斑部変性症						1			1		16	7			26	3.2
網脈絡膜萎縮症					5				2		14	15			36	4.4
未熟児網膜症						1									1	0.1
糖尿病網膜症										71					71	8.6
網膜芽細胞腫							2								2	0.2
網膜はく離					8						11	12			31	3.8
全色盲											1				1	0.1
その他					3	1					5	7	1		17	1.9
視束視路疾患																
視神経萎縮	1		1	2	15		5				3	26	33		86	10.5
視神経欠損																
視神経炎					1	1					1	6			9	1.1
視中枢障害					2		1				1	2			6	0.7
無記入または不明					1						2			1	4	0.5
合計	3	2	1	6	56	6	11	2	62	74	9	425	159	6	822	100.0
百分率%	0.4	0.2	0.1	0.7	6.8	0.7	1.3	0.2	7.5	9.0	1.1	51.7	19.3	0.7	100.0	

注) 無水晶体は白内障を含む。

Table 6-8 盲学校児童生徒の視覚障害原因（年齢不明）

視覚障害原因 眼疾患の 部位と症状	伝染性疾患				外傷	中毒	腫瘍	全身病				先天素因	原因不明	無記入	合計	百分率 %
	麻疹	梅毒	脳膜炎	その他				栄養障害	ベーチエット病	糖尿病	その他					
眼球全体																
緑内障												1	1		2	28.6
水(牛)眼																
小眼球																
無眼球																
無虹彩																
虹彩欠損																
屈折異常																
眼球癆																
白子												1			1	14.3
眼振																
その他																
角膜疾患																
角膜軟化症																
角膜白斑																
その他																
水晶体疾患																
白内障												1			1	14.3
水晶体欠損																
水晶体亜脱臼																
硝子体疾患																
ブドウ膜疾患																
網脈絡膜疾患																
網膜色素変性症																
黄班部変性症																
網脈絡膜萎縮症																
未熟児網膜症																
糖尿病網膜症																
網膜芽細胞腫								1							1	14.3
網膜はく離																
全色盲																
その他																
視束視路疾患																
視神経萎縮												2			2	28.6
視神経欠損																
視神経炎																
視中枢障害																
無記入または不明																
合計								1				5	1		7	100.0
百分率 %								14.3				71.4	14.3		100.0	

注) 無水晶体は白内障に含む。

Table 7 盲学校児童生徒の視覚障害原因の推移

調査年次 視覚障害原因	1910~29 (%)	1952 (%)	1954 (%)	1959 (%)	1964 (%)	1970 (%)	1975 (%)	1980 (%)	1985 (%)
伝染性疾患	36.5	18.1	16.1	12.5	9.96	3.7	1.7	1.7	1.2
外 傷	3.5	4.5	4.1	3.8	3.76	2.2	3.1	2.9	3.3
中 毒		0.5	0.2	0.2	0.22	1.6	5.4	10.7	13.7
腫 瘍	0.9	0.5	0.3	0.3	0.64	1.8	2.6	3.8	5.5
全 身 病	16.4	13.0	8.4	9.1	6.60	4.4	4.52	4.3	4.4
先天素因	29.7	52.3	56.6	71.6	59.16	80.9	76.5	66.9	60.5
原因不明	13.7	11.0	14.3	2.5	19.65	6.4	6.1	8.6	10.8
無 記 入								1.2	0.5
人 数	988	3,645	7,032	8,686	9,935	8,873	8,464	7,799	6,667

(備考) 1959年には554人, 1964年には890人の光明寮(国立視力障害センター)等入所者を含む。

Table 8 盲学校児童生徒の年齢群別視覚障害原因(1985年)

年齢群 視覚障害原因	3~5 (%)	6~12 (%)	13~15 (%)	16~18 (%)	19~21 (%)	22~30 (%)	31以上 (%)
伝染性疾患	3.5	1.7	0.9	1.1	1.1	0.9	1.4
外 傷	4.2	1.3	1.3	2.4	4.6	8.6	6.8
中 毒	21.5	19.4	22.7	14.9	7.5	3.2	0.7
腫 瘍	7.6	9.4	6.0	4.7	3.8	4.3	1.3
全 身 病	2.1	1.5	2.3	1.5	1.9	10.1	17.8
先天素因	51.4	57.6	58.2	63.7	71.6	60.8	51.7
原因不明	9.7	8.7	8.5	10.8	9.2	11.6	19.3
無 記 入		0.4	0.2	0.9	0.2	0.4	0.7
人 数	144	1,567	1,226	1,392	976	533	822

次に眼疾患の部位による分類では全体としては下記のとおりである。(Table 9, Fig. 3)

眼 球 全 体	29.5%
角 膜 疾 患	3.5%
水 晶 体 疾 患	13.9%
硝 子 体 疾 患	0.6%
ブドウ膜疾患	2.0%
網脈絡膜疾患	35.7%
視束視路疾患	13.8%
無記入・不明	0.9%

これを年齢群別に分類して比較すると Table 10 のとおりである。

また、在学者全体及び各年齢群別とも最も高率を示しているのは網脈絡膜疾患、次いで眼球全体である。視覚

障害原因の変化とも関連して、眼疾患の部位と症状にもかなりの推移がうかがわれる。Table 11 は1970年以降の比較である。

更に、今回は調査結果を全国9ブロックに分類して比較してみた。Table 12 は在学者全体の地区別視覚障害原因、また、Table 13 は在学者全体の地区別眼疾患の部位である。概括的に見るとそれほど大きな地域差は無いが、項目によっては、例えば小・中学部4校、高等部は1校の北海道で「中毒」が他の地区よりも非常に高率を示すなどの特徴が認められる。このことは地区によって盲学校在学者の年齢構成に差異があることなどが影響しているものと思われる。そこで本調査において、いずれの学校にも相当数の在学者を有する6~12歳、13~15歳及び16~18歳の3年齢群を取ってその地域差を見るこ

Table 9 盲学校児童生徒の眼疾患の部位の分類（全体）

視覚障害原因 眼疾患の部位	伝染性疾患				外傷	中毒	腫瘍	全身病				先天要因	原因不明	無記入	合計	百分率%
	麻疹	梅毒	脳膜炎	その他				栄養障害	ペーチェット病	糖尿病	その他					
眼球全体	7		3	9	37	9	13	5	3		7	1662	207	5	1967	29.5
角膜疾患	8	2		5	18	5		5			7	144	36	2	232	3.5
水晶体疾患	2		2	2	18	3	2	4	2	3		787	95	9	929	13.9
硝子体疾患			1		3			1	1		1	29	4	1	41	0.6
ブドウ膜疾患				1		1			81	1	2	21	28		135	2.0
網脈絡膜疾患	1			1	45	879	195	4	4	89	4	1019	140	2	2383	35.7
視束視路疾患	4		32	4	96	19	158	2	1	2	60	350	190	4	922	13.8
無記入または不明	1			1	4	1					4	22	18	7	58	0.9
合計	23	2	38	23	221	916	369	21	92	95	85	4034	718	30	6667	100.0
百分率%	0.3	0.03	0.6	0.3	3.3	13.7	5.5	0.3	1.4	1.4	1.3	60.5	10.8	0.5	100.0	

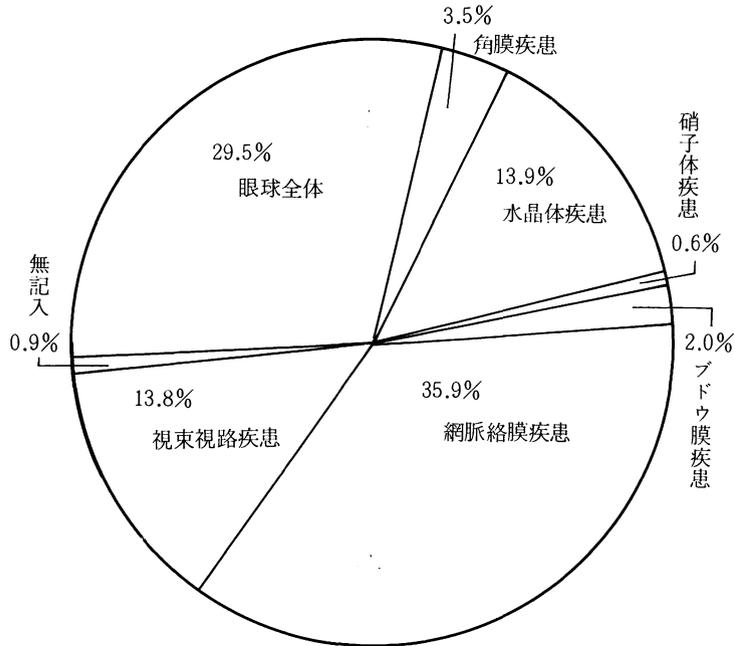


Fig. 3 盲学校児童生徒の眼疾患の分類

Table 10 盲学校児童生徒の年齢群別眼疾患の部位（1985年）

眼疾患の部位	年齢群						
	3～5 (%)	6～12 (%)	13～15 (%)	16～18 (%)	19～21 (%)	22～30 (%)	31以上 (%)
眼 球 全 体	25.7	28.7	30.1	31.3	37.5	28.9	18.5
角 膜 疾 患	4.2	3.7	3.3	3.0	3.1	4.3	4.0
水 晶 体 疾 患	6.9	15.4	14.4	16.7	15.0	10.5	8.0
硝 子 体 疾 患	4.2	1.2	0.2	0.4	0.1	0.4	0.7
ブドウ膜疾患		0.9	0.4	0.7	0.8	6.8	7.7
網脈絡膜疾患	34.0 (21.5)	34.4 (19.1)	38.7 (22.2)	32.5 (14.2)	30.4 (6.7)	32.1 (4.1)	48.3 (0.1)
視束視路疾患	23.6	14.6	11.8	14.9	11.9	16.7	12.3
無記入・不明	1.4	1.1	1.0	0.6	1.2	0.4	0.5
人 数	144	1,567	1,226	1,392	976	533	822

() 内は未熟児網膜症

Table 11 盲学校児童生徒の眼疾患の推移

眼疾患の部位	調査年次			
	1970 (%)	1975 (%)	1980 (%)	1985 (%)
眼 球 全 体	43.1	39.0	34.3	29.5
角 膜 疾 患	8.0	4.2	3.8	3.5
水 晶 体 疾 患	15.3	14.7	15.7	13.9
硝 子 体 疾 患	無 分 類		0.3	0.6
ブドウ膜疾患	1.8	3.0	2.5	2.0
網脈絡膜疾患	15.2	21.7	30.7	35.9
視束視路疾患	9.5	11.6	11.6	13.8
無記入・不明	その他を含め処理		1.0	0.9
人 数	8,873	8,464	7,799	6,667

Table 12 盲学校児童生徒の地区別視覚障害原因（全体）

視覚障害原因	地区名								
	北海道 (%)	東北 (%)	関東 (%)	北陸 (%)	東海 (%)	近畿 (%)	中国 (%)	四国 (%)	九州 (%)
伝染性疾患	0.3	0.9	1.1		0.6	2.4	1.4	0.6	2.0
外 傷	2.5	3.9	2.8	4.0	4.6	2.6	5.7	3.3	2.9
中 毒	20.7	13.8	17.3	10.5	13.4	11.0	11.6	11.1	11.1
腫 瘍	6.0	5.3	6.7	3.7	5.5	5.1	5.0	2.8	6.0
全 身 病	1.6	6.2	3.6	4.7	4.9	5.7	5.3	5.0	3.7
先 天 素 因	54.6	58.2	61.6	62.8	53.9	58.1	62.7	71.4	63.6
原 因 不 明	14.1	12.4	6.4	14.2	16.4	14.1	8.4	6.0	10.1
無 記 入	0.3	0.4	0.4	0.3	0.2	1.0			0.7
人 数	368	565	1,802	325	673	1,218	440	398	878

Table 13 盲学校児童生徒の地区別眼疾患の部位（全体）

眼疾患の部位	地区名								
	北海道 (%)	東北 (%)	関東 (%)	北陸 (%)	東海 (%)	近畿 (%)	中国 (%)	四国 (%)	九州 (%)
眼 球 全 体	33.4	28.1	27.3	30.8	26.8	29.6	32.3	30.7	32.8
角 膜 疾 患	0.5	19.1	3.7	2.2	3.6	4.3	4.3	2.0	4.4
水 晶 体 疾 患	12.3	16.5	12.3	16.0	16.9	12.2	12.3	13.3	15.5
硝子体疾患	2.2		0.5	0.9	0.2	0.8	0.5		1.0
ブドウ膜疾患	1.4	4.1	1.2	2.5	2.7	1.9	2.7	3.3	1.4
網脈絡膜疾患	35.9 (20.4)	35.8 (13.3)	38.1 (16.8)	37.5 (9.5)	37.9 (12.2)	34.8 (10.6)	34.3 (11.1)	37.4 (10.6)	29.7 (10.4)
視束視路疾患	14.4	12.2	14.7	9.9	12.0	14.9	13.6	13.3	14.7
無記入・不明		0.7	1.6	0.3		1.5			0.5
人 数	368	565	1,802	325	673	1,218	440	398	878

Table 14 盲学校児童生徒の地区別・年齢群別視覚障害原因

視覚障害原因	年齢	地区名								
		北海道 (%)	東北 (%)	関東 (%)	北陸 (%)	東海 (%)	近畿 (%)	中国 (%)	四国 (%)	九州 (%)
伝 染 性 疾 患	6~12	0.8	1.9	2.1	—	—	4.6	0.9	—	1.4
	13~15	—	—	0.8	—	0.9	1.0	1.5	1.5	2.6
	16~18	—	0.8	0.5	—	1.6	2.9	—	—	2.0
外 傷	6~12	0.8	2.6	1.1	1.4	—	1.7	2.8	1.4	0.9
	13~15	2.2	0.9	1.7	—	0.9	0.5	2.9	1.5	2.6
	16~18	1.5	3.1	1.6	4.8	6.9	0.8	—	1.6	1.5
中 毒	6~12	18.4	18.0	24.4	19.2	23.2	18.5	13.2	16.7	13.6
	13~15	34.4	21.1	25.3	14.8	22.1	16.4	21.7	23.5	21.9
	16~18	19.1	17.2	18.4	9.5	13.8	15.3	13.5	9.8	8.7
腫 瘍	6~12	7.2	9.0	10.7	4.1	8.7	9.7	10.4	6.9	10.5
	13~15	4.3	5.5	5.5	7.4	8.0	5.5	7.3	4.4	6.5
	16~18	2.9	2.3	7.8	3.2	3.8	4.1	5.8	—	3.6
全 身 病	6~12	2.4	0.6	1.6	—	0.7	3.8	—	—	1.4
	13~15	—	1.8	1.7	1.9	—	6.5	2.9	1.5	1.9
	16~18	—	0.8	2.1	—	1.9	1.7	1.1	—	2.0
先 天 素 因	6~12	56.0	51.9	56.0	63.0	51.5	47.9	66.0	72.2	60.9
	13~15	37.6	61.5	58.5	70.4	49.6	60.2	62.3	61.8	56.8
	16~18	58.8	64.1	62.6	68.3	56.3	54.6	70.8	69.1	71.4
原 因 不 明	6~12	13.6	16.0	3.9	12.3	15.9	13.5	3.8	2.8	9.6
	13~15	21.5	8.3	6.3	5.6	18.6	10.0	5.8	5.9	7.1
	16~18	17.7	11.7	6.2	14.3	16.9	17.8	6.7	11.5	9.7
無 記 入	6~12	0.8	0.6	0.2	—	—	0.4	—	—	1.8
	13~15	—	—	0.3	—	—	—	—	—	0.7
	16~18	—	—	0.8	—	—	2.9	—	—	1.0
人 数	6~12	125	156	439	73	138	238	106	72	220
	13~15	93	109	364	54	113	201	69	68	155
	16~18	68	128	385	63	160	242	89	61	196

Table 15 盲学校児童生徒の地区別・年齢群別眼疾患の部位

眼疾患の部位	地区名	北海道 (%)	東北 (%)	関東 (%)	北陸 (%)	東海 (%)	近畿 (%)	中国 (%)	四国 (%)	九州 (%)
	年齢									
眼 球 全 体	6～12	32.8	28.2	25.3	32.9	31.2	26.5	38.7	29.2	28.2
	13～15	31.1	33.9	26.7	40.7	25.7	32.3	34.8	29.4	29.7
	16～18	33.8	25.0	25.7	41.3	25.6	30.6	38.2	41.0	40.8
角 膜 疾 患	6～12	—	4.4	3.9	1.4	2.9	4.2	4.7	2.8	5.5
	13～15	—	1.8	2.8	4.4	7.1	4.0	4.4	1.5	4.5
	16～18	—	1.6	3.6	1.6	4.9	4.1	1.1	1.6	3.6
水 晶 体 疾 患	6～12	11.2	19.2	13.9	20.6	21.0	10.9	10.4	23.6	17.3
	13～15	9.6	17.4	12.6	11.1	17.7	16.4	14.5	17.7	14.2
	16～18	17.6	19.9	14.3	17.5	19.4	15.7	23.6	13.1	15.8
硝 子 体 疾 患	6～12	1.6	—	0.5	1.4	—	3.8	0.9	—	1.8
	13～15	—	—	—	1.9	—	0.5	—	—	—
	16～18	2.9	—	—	—	0.6	—	—	—	1.0
ブドウ膜疾患	6～12	1.6	1.3	—	2.8	—	1.3	2.8	2.8	—
	13～15	1.0	0.9	0.3	—	—	0.5	1.5	—	0.7
	16～18	1.4	—	1.0	—	1.3	0.8	1.1	—	—
網脈絡膜疾患	6～12	33.6	32.6	39.2	26.0	35.5	33.2	29.3	36.1	31.8
	13～15	47.3	35.8	40.4	30.7	43.4	31.8	34.8	39.7	38.7
	16～18	30.9	35.9	39.0	28.6	28.8	36.4	25.8	27.9	22.5
視束視路疾患	6～12	16.0	12.8	14.6	15.1	9.4	18.9	13.2	5.6	15.5
	13～15	9.6	10.1	14.8	5.6	6.2	13.4	10.3	11.8	12.3
	16～18	13.2	17.2	14.8	11.1	20.0	12.0	10.1	16.4	16.3
無記入・不明	6～12	3.2	1.3	2.7	—	—	1.3	—	—	—
	13～15	1.0	—	2.5	—	—	1.0	—	—	—
	16～18	—	0.1	1.6	—	—	0.4	—	—	—
人 数	6～12	125	156	439	73	138	238	106	72	220
	13～15	93	109	364	54	113	201	69	68	155
	16～18	68	128	385	63	160	242	89	61	196

とにした。Table 14 は、地区別・年齢群別視覚障害原因、また Table 15 は地区別・年齢群別眼疾患の部位である。

(3) 盲学校在学者の視覚障害発症年齢

盲学校在学者の視覚障害発症年齢については Table 16 のとおりであるが、発症時期を正確に判定することは困難である。従って、本調査においては障害に気付いた年齢と解すべきであろう。調査結果を見ると0歳が4,120人で全体の61.8%、また、6歳未満を取れば4,829人で同72.5%で、生来を含めて就学年齢以前に集中して

いる。

(4) 盲学校在学者の視力

盲学校在学者の視力の調査に当たっては、右、左及び両眼の裸眼視力と、矯正可能な者については各矯正視力についてもそれぞれの項に記入を依頼したが、この集計においては以上のうち最も良い視力の記入項目による。

調査結果から見ると、盲学校在学者の視力は、視力0から1.5にまで及んでいる。これを教育的観点から盲、準盲、弱視及びその他の視力に分類すると次のとおりである。

Table 16 盲学校児童生徒の視覚障害発症
年齢（障害に気付いた時期）

障害発症年齢	人 数	百分率 (%)
0 歳	4,120	61.8
1 歳未満	159	2.4
1～ 2歳未満	157	2.4
2～ 3歳未満	112	1.7
3～ 4歳未満	116	1.7
4～ 5歳未満	72	1.1
5～ 6歳未満	93	1.4
6～ 7歳未満	115	1.7
7～ 8歳未満	62	0.9
8～ 9歳未満	51	0.8
9～10歳未満	51	0.8
10～19歳	501	7.5
20～29歳	236	3.5
30～39歳	211	3.2
40～49歳	94	1.4
50～59歳	12	0.2
60歳以上		
無 記 入	358	5.4
不 明	147	2.2
合 計	6,667	100.0

Table 17 盲学校児童生徒の視力程度

視 力	人 数	百分率 (%)
0	1,304	19.6
光 覚	582	8.7
手 動 弁	290	4.4
指 数 弁	182	2.7
0.01	270	4.1
0.02	333	5.0
0.03	292	4.4
0.04	284	4.3
0.05	216	3.2
0.06	236	3.5
0.07	170	2.6
0.08	182	2.7
0.09	125	1.9
0.1	573	8.6
0.12	35	0.5
0.15	244	3.7
0.2	399	6.0
0.25	65	1.0
0.3	308	4.6
0.4	135	2.0
0.5	70	1.1
0.6	56	0.8
0.7	28	0.4
0.8	23	0.3
0.9	11	0.2
1.0	22	0.3
1.2	16	0.2
1.5	10	0.2
測定不能	64	1.0
不 明	142	2.0
合 計	6,667	100.0

Table 18 盲学校児童生徒の年齢群別視力の分布

視力	年齢群						
	3～5 (%)	6～12 (%)	13～15 (%)	16～18 (%)	19～21 (%)	22～30 (%)	31以上 (%)
0.02 未満	58.3	49.9	46.2	34.2	27.8	26.1	36.9
0.02 以上 0.04 未満	4.2	7.3	7.6	8.8	8.7	13.1	16.2
0.04 以上 0.1 未満	7.6	14.9	17.5	21.5	20.4	18.6	18.9
0.1 以上 0.3 未満	6.3	15.5	18.4	22.2	24.5	24.8	19.1
0.3 以上	2.1	5.7	8.2	12.0	17.0	15.9	8.3
測定不能・不明	21.5	6.7	2.0	1.3	1.6	1.5	0.7
人 数	144	1,567	1,226	1,392	976	533	822

盲	視力0.02未満	39.4%	
準盲	視力0.02以上0.04未満	9.4%	
弱視	視力0.04以上0.1未満	18.2%	} 37.9%
	視力0.1以上0.3未満	19.7%	
その他	視力0.3以上	10.2%	

また、各視力の段階別及び年齢群別にその分布状態を見ると Table 17, Table 18 のとおりである。

3 考 察

近年、盲学校在学者の数は著しく減少しつつある中で、高齢者の占める率は上昇傾向にある。例えば、1980年調査において7,799人中31歳以上は792人の10.2%であったのに対し、今回調査では6,667人中822人の12.3%に達している。眼疾の進行や中途失明による入学者増を反映している。また、重複障害者の増加傾向が顕著で、6～12歳35.8%、13～15歳28.3%、16～18歳19.0%と、低年齢の在学者ほどその比率は高い。1980年調査に比較すると、この5年間にそれぞれ5.8%、7.8%、6.8%も増加していることがわかる。このように年齢構成の変動、重複障害者の増加は、当然盲学校在学者の視覚障害原因の統計に大きな影響を及ぼしているのである。

視力の分布状況については、全体的には1980年調査と大きな変化は見られないが、重度の視力障害で盲に分類される視力0.02未満では、3～5歳が58.3%で最も高く、22～30歳の22.1%に至る間は年齢上昇につれて直線的に下降しているが、31歳以上になると36.9%と再び急上昇している。また、視力0.3以上では3～5歳の2.1%から、年齢上昇につれて、重度障害とは反対に次第に多くなり、22～30歳で15.9%に達している。ところが31歳以上になると逆に8.3%とほぼ半減し、視力分布の傾向が30歳を境にして、いずれも逆転している。

また、男女の比率では女子1に対し男子1.82の割合で、1970年調査における同1対1.44から調査年次を追って男子の比率が顕著に上昇している。

次に、視覚障害原因を見ると、戦前最も比率の高かった伝染性疾患は、戦後予防医学の進歩、抗物質の普及等治療法の改善によって急激に減少し、1975年、1980年調査ではいずれも全調査対象中1.7%までに激減していたのが、今回は更に1.2%に低下している。これを年齢群別に分類すると6歳以上の各年齢群がいずれもほぼ1%前後にあるのに対し、3～5歳は3.5%となっているが、内容的には同年齢群111人中5人のすべてが脳膜炎となっている。先天素因は戦前の29.7%が戦後は急上昇し、1970年には80.9%にも達し、医療等の関係で後天性

疾患の発生が防止されていることを如実に証明している。しかし、その後統計の上では下降傾向を示し、今回は60.5%となっている。これは1975年調査以降中毒が急上昇し、1970年において1.6%であったのが今回は13.7%を占めるに至ったことや、原因不明として診断または処理されているのが10.8%もあることなど、相対的な比率の変化についても注目する必要がある。年齢群別に見て顕著な特徴を示しているのは中毒と全身病である。中毒はそのほとんどが未熟児網膜症であるが、3～5歳で21.5%、6～12歳19.4%、13～15歳22.7%というように低年齢に多い。これに反し全身病は、全体としては戦前の16.4%に対し、1970年以降は4%台に減少しているが、今回調査の22～30歳で10.1%、31歳以上17.8%と高齢群における比率は著しく高い。これらは往年の栄養障害等による失明に代り、パーチェット、糖尿病性網膜症等による入学者増によるものである。

視覚障害原因を全国9地区に分類し、それぞれ全体及び年齢群別に比較すると、全体としては北海道の中毒が20.7%と他地区の群を抜き、また、地区別・年齢群別では、例えば、北海道の13～15歳の中毒が34.4%、先天素因においては北陸の13～15歳が70.4%、四国の6～12歳72.2%、九州の16～18歳71.4%というように、全体平均から見てもかなり高率を示しているものや、逆に北海道の13～15歳の37.6%、近畿の6～12歳の47.9%などのように低率を示しているのが注目される。失明原因と地域性、あるいは医療や生活環境等との関連を見る上で今後検討を要する一資料と思われる。

眼疾患の部位について見ると、1970年調査において眼球全体は43.1%であったのが次第に減少し、今回は29.5%となり、また、同1970年網脈絡膜疾患は15.2%であったのが、今回は35.9%に増加するなど著しい変化が見られる。未熟児網膜症、網膜色素変性症、網膜芽細胞腫、糖尿病性網膜症、網膜はく離、黄斑部変性症等、それぞれ在学者の低年齢、中年齢、高齢とも、いずれも関連ある眼疾患の増加を反映していることがわかるのである。なお、これら網脈絡膜疾患を年齢群別に分類すると、3～30歳の各年齢群とも約30～38%と、かなり高率であるが、特に31歳以上では更に一挙に48.3%にまで達している。地区別の全体ではいずれも30～38%とさほど差異は見られないが、13～15歳で北海道、関東、東海、また、16～18歳で北海道、東北、関東、近畿は他地区に比較して顕著に高率を示している。なお、1964年調査以降増加の一途をたどってきた未熟児網膜症は、おそらく今回調査をピークとして今後減少することも予想されるが、こ

Table 19 盲学校における未熟児網膜症の年齢区分別頻度の推移

1964年			1970年			1975年			1980年			1985年		
年齢	患児/人数計	%	年齢	患児/人数計	%	年齢	患児/人数計	%	年齢	患児/人数計	%	年齢	患児/人数計	%
6～11	9/1,859	0.5	4～9	67/1,061	6.3	4～9	270/1,238	21.8	3～5	31/152	20.4	3～5	31/144	21.5
12～14	3/1,905	0.2	10～14	26/2,406	1.1	10～14	115/2,013	5.7	6～12	501/2,142	23.4	6～12	299/1,567	19.1
15～17	4/2,176	0.2	15～19	4/3,627	0.1	15～19	26/2,887	0.9	13～15	148/1,221	12.1	13～15	272/1,226	22.2
18～20	1/1,366	0.1	20～29	1/1,322	0.1	20～29	3/1,477	0.2	16～18	83/1,463	5.7	16～18	197/1,392	14.2
21～25	5/1,092	0.5				30～	-/772	-	19～21	25/1,196	2.1	19～21	65/976	6.7
26～30	3/527	0.6							22～24	1/369	0.3	22～24	11/266	4.1
30～	1/205	0.5							25～27	-/221	-	25～27	/145	-
									28～30	-/224	-	28～30	/122	-
									31～	-/792	-	31～	1/822	0.1
合計	26/9,935	0.3	合計	98/8,873	1.1	合計	415/8,464	4.9	合計	789/7,799	10.1	合計	876/6,667	13.1

(備考) ・1964年には、国立視力障害センター等の入所者890人を含む。

・1980年調査から年齢区分を学齢に合せた。

れまでの年齢区分別頻度の推移を見ると、Table 19 のとおりである。小・中学部の在学者に重複障害が多いことと未熟児網膜症との関連については前回調査結果においても明らかにしたが、これらに関しては別稿において報告する。

最後に、視覚障害者に対する教育や福祉の改善・充実を図り、あるいは失明予防等の対策を講ずる上で、最も必要な基礎資料の一つは、視覚障害者の実態とその動向を正確に把握することである。特にその中でも視覚障害原因の統計を定期的に調査研究して、比較分析することが重要であるが、この種の全国調査は我が国においては本調査が唯一のものである。それだけに、多くの方々の理解と協力によってまとめることができたこの貴重な資料が、各方面において活用され、我が国視覚障害者の教育・福祉・医療等各分野の発展に資することを願ってやまない。

注

(注1) 盲学校在学者の視覚障害原因等調査の推移

盲学校在学者の視覚障害原因等調査のうち、全国規模において実施されてきたものは次のとおりである。

①1910～1929年調査

国立東京盲学校在学者988人について、須田卓爾、鹿野武十による調査である。同校は唯一の国立校で、特に師範部の生徒は全国から入学していたことから、全国的調査としての意味を持っている。

②1952年調査

日本眼衛生協会(会長、庄司義治)による初めての全国調査。盲学校44校3,645人の調査票を回収した。分類に当たっては大山信郎指導の下で、主として眼衛生協会の小山正野が担当した。

③1954年調査

日本眼衛生協会による第2回調査。盲学校70校7,032人について前回同様に分類が行われた。

④1959年調査

日本眼衛生協会、順天堂大学医学部眼科学教室(中島章教授)、文部省近親婚調査班の共同調査として実施し、順天堂大学の中島章が分類した。盲学校66校8,132人に加え、国立光明寮3施設554人、計8,686人が対象。この調査には文部省科学研究費とロックフェラー財団からの研究費が充当された。

⑤1964年調査

前回同様の調査が東洋レーヨン後援により実施され、順天堂大学の中島章、田辺歌子が分類した。盲学校75校8,045人及び盲人施設10か所890人、計9,935人が対象。

⑥1970年調査

東京教育大学教育学部リハビリテーション教育研究施設の継続的事業として大山信郎の企画総括のもとに実施し、谷村裕、藤田千代が担当した。盲学校71校8,873人が対象。

⑦1975年調査

同上研究施設の第2回調査として実施し、大川原潔、谷村裕、藤田千代が担当。盲学校73校8,464人が対象。

⑧1980年調査

同上東京教育大研究施設の組織、機能を継承した筑波大学学校教育部心身障害教育研究分野の継続的事業として大川原 潔企画総括のもとに実施し、藤田千代及び研究生川崎良子、木藤政博が分担したほか、学内外関係者の協力を得た。盲学校73校7,799人及び弱視学級を置く小・中学校63校449人を対象。

⑨1985年調査

前回同様筑波大学学校教育部心身障害教育研究分野が実施し、大川原 潔、藤田千代及び研究生遠藤 勉、斉藤元秀が担当し、分類に当たっては一部順天堂大学医学部眼科学教室の協力を得たほか、本調査に関し別記の学内外関係者の協力を得た。盲学校72校6,667人及び別稿の弱視学級を置く小・中学校73校399人を対象。

参 考 文 献

- 1) 小山正野 1955 我国盲学校児童生徒の失明原因
日本赤十字社・日本眼衛生協会
- 2) 文部省特殊教育課 1964～1985 特殊教育資料
- 3) 中島 章 1963 盲学校児童生徒の失明原因 日本
眼衛生協会
- 4) 中島 章・田辺歌子 1969 我国における青少年の

失明原因推移について 順天堂大
学

- 5) 藤木慶子・田辺歌子・中島 章 1982 全国国立視
力障害センター入所者の視覚障害
原因等調査(1980年)報告 弱視
教育20-3
- 6) 大川原 潔・藤田千代外 1981 全国盲学校及び小
・中学校弱視学級児童生徒の視
覚障害原因等調査結果について
(1980年)筑波大学学校教育部紀
要第3巻
- 7) 大山信郎・谷村 裕・藤田千代 1972 全国盲学校
児童生徒の視覚障害原因(1970年
度)東京教育大学教育学部紀要18
- 8) 大山信郎・谷村 裕・藤田千代 1972 視力と点字
・活字との関係 東京教育大学教
育学部紀要18
- 9) 谷村 裕・大川原潔・藤田千代 1977 全国盲学校
児童生徒の視覚障害原因(1975年
度) 東京教育大学教育学部紀要
23

Ⅱ 全国小・中学校弱視学級児童生徒の視覚障害原因

— 1985年・全国実態調査を中心に —

大川原 潔 藤田 千代 遠藤 勉 藤木 慶子

1 調査目的及び方法

視覚障害児を対象とした教育機関としては盲学校のほかに、小・中学校の弱視学級がある。全国の弱視学級児童生徒を対象とした視覚障害原因等調査は、1977年湖崎克・山崎康宏外によって初めて実施されたが、1980年以降は筑波大学学校教育部心身障害教育研究分野の事業として、5年毎に実施している全国盲学校児童生徒の視覚障害原因等調査と併行して行うことになった。今回の調査はその2回目に当たる。

盲学校と弱視学級はそれぞれ制度的には主たる対象者を異にしているし、在学者の年齢構成、生育歴等においても相異なる面がある。そこで本調査は、この両者を比較し、あるいは総合的に検討するための資料としてまとめ、今後における諸施策の推進に資することを目的に行ったものである。

昭和60年度（1985年）に設置されている小学校53校の弱視学級65学級319人、中学校21校の弱視学級23学級の86人、計405人の弱視児童生徒を対象に、盲学校同様の「視覚障害原因等調査票」（Ⅰの Fig. 1 参照）によって調査した。回収率は学校数にして100%、集計対象となった個票は399人分であった。

なお、調査時期は盲学校同様7月1日現在で行ったものである。

2 調査結果

(1) 視覚障害原因と眼疾患の部位と症状

盲学校調査における分類と同様、全対象者を視覚障害の原因別と眼疾患の部位と症状による相関分類を行った。（Table 20）

また、対象者の年齢を6～12歳の小学校の相当年齢と、13～15歳の中学校の相当年齢の2群に分類して集計を行い、両者の相異を比較検討した。（Table 21, Table 22）

視覚障害を原因別に見ると次のとおりである。更に、これをグラフで示したのが Fig. 4 である。

伝染性疾患は全体で0.8%で麻疹と脳膜炎によるものであり、外傷は1.8%、腫瘍は2.0%と少数である。中毒は9.0%で、そのほとんどが未熟児網膜症である。全身病は全体の0.3%に過ぎない。

先天素因による障害は65.7%を占め、小・中学校別（Table 23）に見ても弱視児童生徒の視覚障害原因は、先天素因に集中していることがわかる。

眼疾患の部位と症状による分類は次のとおりである（Fig. 5）

眼球全体37.1%のうち、屈折異常14.0%、水晶体疾患26.1%のうち白内障が24.6%と最も高い数値を示している。硝子体疾患0.8%、ブドウ膜疾患1.0%である。網脈絡膜疾患は19.3%でその主なものは未熟児網膜症の8.5%である。視束視路疾患は10.5%で、うち視神経萎縮が9.0%を占めている。これを小・中学校別に見ると Table 24 のとおりである。

Table 20 小・中学校弱視学級児童生徒の視覚障害原因（全体）

視覚障害原因 眼疾患の 部位と症状	伝染性疾患				外 傷	中 毒	腫 瘍	全身病				先 天 素 因	原 因 不 明	無 記 入	合 計	百 分 率 %
	麻 疹	梅 毒	脳 膜 炎	そ の 他				栄 養 障 害	ペ ー チ エ ッ ト 病	糖 尿 病	そ の 他					
眼 球 全 体	1		1		1		1					109	35		148	37.1
緑 内 障												10	3		13	3.3
水 (牛) 眼												5			5	1.3
小 眼 球												10	3		13	3.3
無 眼 球																
無 虹 彩												7	1		8	2.0
虹 彩 欠 損												3	1		4	1.0
屈 折 異 常			1		1							41	13		56	14.0
眼 球 癆																
白 子												6	3		9	2.3
眼 振												18	7		25	6.3
そ の 他	1						1					9	4		15	3.8
角 膜 疾 患					1							5	2		8	2.1
角 膜 軟 化 症													1		1	0.3
角 膜 白 斑					1							4			5	1.3
そ の 他												1	1		2	0.5
水 晶 体 疾 患												95	9		104	26.1
白 内 障												91	7		98	24.6
水 晶 体 欠 損												1			1	0.3
水 晶 体 亜 脱 臼												3	2		5	1.3
硝 子 体 疾 患												3			3	0.8
ブドウ膜疾患												1	3		4	1.0
網脈絡膜疾患					35	2	1					31	7	1	77	19.3
網膜色素変性症												9			9	2.3
黄斑部変性症							1					11	2	1	15	3.8
網脈絡膜萎縮症												4	1		5	1.3
未熟児網膜症					34										34	8.5
糖尿病網膜症																
網膜芽細胞腫							2					1			3	0.8
網膜はく離												3			3	0.8
全 色 盲												2	1		3	0.8
そ の 他					1							1	3		5	1.3
視 束 視 路 疾 患			1		4	1	5					17	14		42	10.5
視 神 經 萎 縮			1		4	1	4					16	10		36	9.0
視 神 經 欠 損																
視 神 經 炎													1		1	0.3
視 中 枢 障 害							1					1	3		5	1.3
無記入または不明					1							1	1	10	13	3.3
合 計	1		2		7	36	8	1				262	71	11	399	100.0
百 分 率 %	0.3		0.5		1.8	9.0	2.0	0.3				65.7	17.8	2.8	100.0	

注) 無水晶体は白内障に含む。

Table 21 小学校弱視学級児童生徒の視覚障害原因（6～12歳）

視覚障害原因 眼疾患の 部位と症状	伝染性疾患				外傷	中毒	腫瘍	全身病				先天素因	原因不明	無記入	合計	百分率%
	麻疹	梅毒	脳膜炎	その他				栄養障害	ベーチェット病	糖尿病	その他					
眼球全体																
緑内障											7	3			10	3.2
水（牛）眼											4				4	1.3
小眼球											7	3			10	3.2
無虹彩											4				4	1.3
虹彩欠損											3	1			4	1.3
屈折異常											35	9			44	14.3
眼球癆																
白子											5	2			7	2.3
眼振											16	4			20	6.5
その他	1										6	2			9	2.9
角膜疾患																
角膜軟化症												1			1	0.3
角膜白斑					1						4				5	1.6
その他							1					1			2	0.6
水晶体疾患																
白内障											74	6			80	26.0
水晶体欠損											1				1	0.3
水晶体亜脱臼											2	1			3	1.0
硝子体疾患											3				3	1.0
ブドウ膜疾患											1	2			3	1.0
網脈絡膜疾患																
網膜色素変性症											8				8	2.6
黄斑部変性症									1		7	2	1		11	3.6
網脈絡膜萎縮症											3				3	1.0
未熟児網膜症						23									23	7.5
糖尿病網膜症																
網膜芽細胞腫							2				1				3	1.0
網膜はく離											3				3	1.0
全色盲											2	1			3	1.0
その他					1						1	2			4	1.3
視束視路疾患																
視神経萎縮			1		4	1	3				14	7			30	10.0
視神経欠損																
視神経炎																
視中枢障害							1				1	3			5	1.6
無記入または不明					1						1	1	2		5	1.6
合計	1		1		6	25	7	1			213	51	3		308	100.0
百分率%	0.3		0.3		1.9	8.1	2.3	0.3			69.2	16.6	1.0		100.0	

注) 無水晶体は白内障に含む。

Table 22 中学校弱視学級児童生徒の視覚障害原因（13～15歳）

視覚障害原因 眼疾患の 部位と症状	伝染性疾患				外 傷	中 毒	腫 瘍	全身病				先 天 素 因	原 因 不 明	無 記 入	合 計	百 分 率 %
	麻 疹	梅 毒	脳 膜 炎	そ の 他				栄 養 障 害	ベ ー チ エ ッ ト 病	糖 尿 病	そ の 他					
眼 球 全 体																
緑 内 障												3			3	3.3
水 (牛) 眼												1			1	1.1
小 眼 球												3			3	3.3
無 眼 球																
無 虹 彩												3	1		4	4.4
虹 彩 欠 損																
屈 折 異 常			1		1							6	4		12	13.2
眼 球 癆																
白 子												1	1		2	2.2
眼 振												2	3		5	5.5
そ の 他												3	2		5	5.5
角 膜 疾 患																
角 膜 軟 化 症																
角 膜 白 斑																
そ の 他												1			1	1.1
水 晶 体 疾 患																
白 内 障												17	1		18	19.8
水 晶 体 欠 損																
水 晶 体 亜 脱 臼												1	1		2	2.2
硝 子 体 疾 患																
ブドウ膜疾患													1		1	1.1
網脈絡膜疾患																
網膜色素変性症												1			1	1.1
黄班部変性症												4			4	4.4
網脈絡膜萎縮症												1	1		2	2.2
未熟児網膜症						11									11	12.1
糖尿病網膜症																
網膜芽細胞腫																
網膜はく離																
全 色 盲																
そ の 他													1		1	1.1
視 束 視 路 疾 患																
視 神 經 萎 縮							1					2	3		6	6.6
視 神 經 欠 損																
視 神 經 炎													1		1	1.1
視 中 枢 障 害																
無記入または不明															8	8.8
合 計			1		1	11	1					49	20	8	91	100.0
百 分 率 %			1.1		1.1	12.1	1.1					53.9	22.0	8.8	100.0	

注) 無水晶体は白内障に含む。

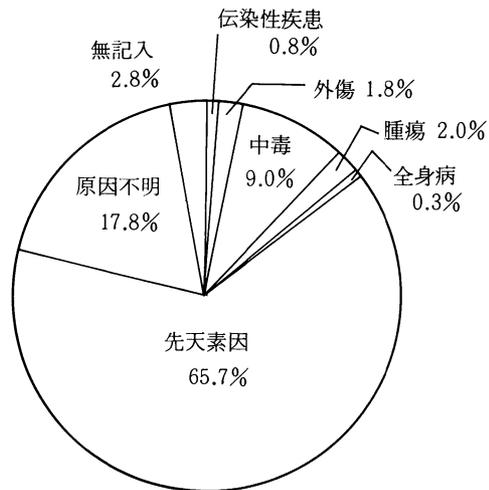


Fig. 4 小・中学校弱視学級児童生徒の視覚障害原因

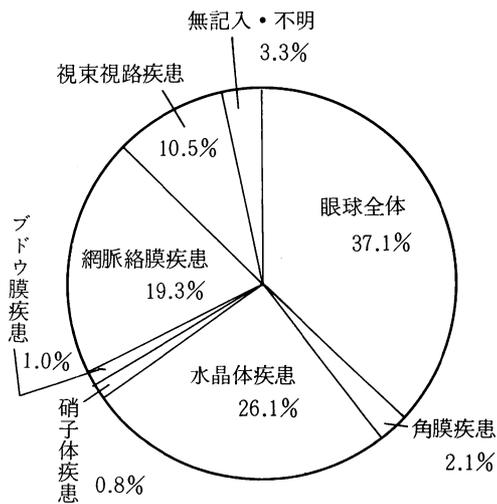


Fig. 5 小・中学校弱視学級児童生徒の眼疾患の部位

Table 23 小・中学校別視覚障害原因（％）

視覚障害原因	小学校弱視学級	中学校弱視学級
伝染性疾患	0.6	1.1
外傷	2.0	1.1
中毒	8.1	12.1
腫瘍	2.3	1.1
全身病	0.3	
先天素因	69.2	53.9
原因不明	16.6	22.0
無記入	1.0	8.8

Table 24 小・中学校別眼疾患の部位（％）

眼疾患の部位	小学校弱視学級	中学校弱視学級
眼球全体	36.4	38.5
角膜疾患	2.6	1.1
水晶体疾患	27.3	22.0
硝子体疾患	1.0	
ブドウ膜疾患	1.0	1.1
網脈絡膜疾患	18.8	20.9
視束視路疾患	11.4	7.7
無記入・不明	1.6	8.8

Table 25 小・中学校弱視学級児童生徒の視覚障害原因の推移（％）

原因 年度	伝染性疾患	外傷	中毒	腫瘍	全身病	先天素因	原因不明	無記入	調査人数
1972年	0	1.5	4.6	0.5	0.5	66.0	26.9		197人
1980年	0.2	0.9	12.9	1.8	0.2	71.5	11.8	0.7	449人
1985年	0.8	1.8	9.0	2.0	0.3	65.7	17.8	2.8	399人

Table 26 小・中学校弱視学級児童生徒の眼疾患の部位の推移（％）

部位疾患 年度	眼球全体	角膜疾患	水晶体疾患	硝子体疾患	ブドウ膜疾患	網脈絡膜疾患	視束視路疾患	無記入・不明	弱視	調査人数
1972年	50.8	1.5	16.8		2.0	14.7	8.6	5.6		197人
1977年	41.0	1.0	21.2		5.5	22.7	5.8	0.5	2.4	415人
1980年	44.9	0.9	21.4	0.7	0.2	21.8	7.3	2.7		449人
1985年	37.1	2.1	26.1	0.8	1.0	19.3	10.5	3.3		399人

このように弱視学級においては先天要因と中毒で74.7%となり、主要原因として挙げられる。症状としては、屈折異常、白内障、未熟児網膜症、視神経萎縮が主なものとなっているのが特徴的である。

弱視学級児童生徒に対する視覚障害原因に関する全国調査の推移を見ると、Table 25、Table26となる。特に顕著な比率変動は見られない。

(2)弱視学級児童生徒の視力

次に、弱視学級児童生徒の視力の分布状況は、Table 27 に示すとおり盲学校同様視力0から1.5に及んでいる。

これらについて教育的観点から区分してその比率を見ると次のとおりである。

盲	視力0.02未満	1.3%	
準 盲	視力0.02以上 0.04未満	3.0%	
弱 視	視力0.04以上 0.1 未満	18.4%	} 61.3%
	視力0.1以上 0.3 未満	42.9%	
	その他	視力0.3以上	

現行制度とも関連して当然のことながら視力0.1～0.3未満が171人の42.9%と高い比率を占めているが、視力0.1未満の90人22.6%の中には、盲、準盲もかなり含まれているし、視力だけの面では教育上問題にならない視力0.3以上が136人34.1%を占めているのが注目される。

なお、弱視学級児童生徒の使用文字調査では98.5%が、当然のことながら普通文字の対象者で、その他点字と普通文字両用等が若干含まれている。

3 考 察

盲学校と小・中学校弱視学級在学者の視覚障害原因等を比較検討する場合、まず注意しなければならないことは、在学者全体

Table 27 小・中学校弱視学級児童生徒の視力

視 力	人 数	百分率(%)
0	1	0.3
光 覚		
手 動 弁		
指 数 弁	1	0.3
0.01	3	0.8
0.02	11	2.8
0.03	1	0.3
0.04	7	1.8
0.05	16	4.0
0.06	14	3.5
0.07	5	1.3
0.08	25	6.3
0.09	6	1.5
0.1	69	17.3
0.12	1	0.3
0.15	27	6.8
0.2	60	15.0
0.25	14	3.5
0.3	46	11.5
0.4	29	7.3
0.5	17	4.3
0.6	10	2.5
0.7	20	5.0
0.8	7	1.8
0.9	4	1.0
1.0	1	0.3
1.2	1	0.3
1.5	1	0.3
測定不能	1	0.3
不 明	1	0.3
合 計	399	100.0

では年齢構成に著しい差異があることである。盲学校は3歳から最高68歳までで、中途失明者も多いのに対し、弱視学級は標準的な学齢（6～15歳）である。従って発症時期等の年代やその社会的背景にも差異のあることを認識しなければならない。

視覚障害原因について特徴的なものを比較すると、外傷では盲学校3.3%に対し、弱視学級1.8%、同中毒は13.7%と9.0%、腫瘍5.5%と2.0%、全身病も盲学校4.4%に対して弱視学級0.3%となっている。また、盲学校の6～12歳で中毒は19.4%、同13～15歳では22.7%であるのに対し、弱視学級の6～12歳は8.1%、13～15歳は12.1%で、盲学校に中毒に起因する未熟児網膜症が集中していることがわかる。

眼疾患の部位についても盲学校と弱視学級を比較すると、例えば次のような特徴が見られる。盲学校全体の水晶体疾患は13.9%であるのに対し、弱視学級全体では26.1%、同網脈絡膜疾患では35.7%に対し、19.3%である。その他同年齢群についてもⅠで報告した盲学校の調査結果と比較するとかなりの違いが見られる。

また、弱視学級の視覚障害原因を1980年調査と比較すると、中毒が12.9%から9.0%に減少し盲学校における増加の傾向とはその様相を異にしている。

次に、弱視学級児童生徒の視力についてであるが、各段階別の比較は別として、広がり範囲においては盲学校と変るところがない。このことは、視覚障害児の教育的措置について、制度と現実とがかなり遊離していることの現れである。個々の児童生徒に最も適した教育の場とそのための諸条件について今後総合的な検討を要すべき問題と課題が示唆されるのである。

Ⅲ 全国盲学校児童生徒の重複障害の実態

— 1985年・全国実態調査を中心に —

大川原 潔 藤田 千代 遠藤 勉 藤木 慶子

1 調査目的及び方法

盲学校はいうまでもなく視覚に障害のある児童生徒を対象とした教育機関であるが、在学者の実態を見ると、視覚以外に他の障害を併せ有する児童生徒（以下、重複障害児という。）が近年次第に増加の傾向にあり、その種類も複雑多岐にわたるとともに重度化の様相を強めている。これは視覚障害を含めて広く心身障害の発生原因とも深い関係のあることはいうまでもない。そこで本調査においては、視覚障害原因と重複障害との関係を通して、盲学校における重複障害児の実態を明らかにし、この教育の改善・充実に資することとした。

本調査は1980年調査に引続いて第2回目に当たるが、両調査を比較して見るとき、この5年間における盲学校重複障害児の実態の変化に注目させられる面が多いのである。

なお、本調査は、Ⅰにおいて報告した全国盲学校児童生徒の視覚障害原因等調査において回収した「視覚障害原因等調査票」6,667枚（人）のうち、「重複障害の有る場合の項に回答のあった1,371人について、全体的な集計・分類とは別に、年齢、視覚障害に合併する他の障害の種類、視覚障害原因、視力及び視力と使用文字との関係等について分析したものである。

2 調査結果

(1)年齢別及び地区別重複障害児の実態

1,371人の重複障害児を7つの年齢群に分類し、それぞれの年齢群に在学する全児童生徒に占める重複障害児の比率を示すと Table 28 のとおりである。3～5歳は52.1%と最も高く、6～12歳は35.8%、13～15歳は28.3%で幼稚部相当の年齢群は過半数を占め、小・中学部においてもかなりの比率を占めていることがわかる。また、16～18歳の通常の高学年齢層にも19.0%を占めている。近年盲学校における重複障害児は急激に増加の傾向が見られるが、6～12歳、13～15歳、16～18歳の3年齢群について前回の1980年調査と比較してみると Table 29 のとおりである。

また、全国を9地区に分類してその実態を比較すると Table 30 となる。関東の27.8%を最高に、北海道を22.6%、近畿21.2%とかなり高く、最も低い地区は四国の12.1%と、地区によって較差の大きいことがわかる。

(2)視覚障害と合併する他の障害の種類

1,371人の重複障害児について、視覚障害に合併する他の障害をその種類別に分類すると Table 31 のとおりである。知能障害の有る重複障害児は1,371人中1,104人で全体の80.5%にも達しており、うち単一の知能障害だけを取ってみても688人50.2%を占めている。知能障害に加えて更にそれ以外の障害を複合する者は30%以上あるなど重度・重複化の実態が深刻になってきていることを知ることができる。また、視覚障害に加えて聾を合併する者は23人、難聴を合併する者も88人在学しており、盲学校がいわゆる盲聾児教育の場として重要な位置を占めていることがわかるのである。なお、肢体不自由児も348人に達している。重複障害の種類別・年齢群別実数の実態を表示すれば Table 32 のとおりである。

Table 28 年齢群別重複障害児の比率

年齢	在学者全体	うち重複障害児 (%)
3～5	144	75 (52.1)
6～12	1,567	561 (35.8)
13～15	1,226	347 (28.3)
16～18	1,392	265 (19.0)
19～21	976	60 (6.2)
22～30	533	33 (6.2)
31以上	822	30 (3.7)
合計	6,667	1,371 (20.6)

Table 29 盲学校児童生徒の年齢群別重複障害児の推移

年齢	年度	調査対象数	重複障害児童	百分率 (%)
6～12	1980年	2,142	643	30.0
	1985年	1,567	561	35.8
13～15	1980年	1,221	250	20.5
	1985年	1,226	347	28.3
16～18	1980年	1,463	178	12.2
	1985年	1,392	265	19.0

Table 31 重複障害の種類別分類

重複障害の種類		人数	(%)
知能	知能のみ	688	50.2
	知能+肢体	148	10.8
	知能+肢体+言語	73	5.3
	知能+言語	144	10.5
	知能+聾+言語	12	0.9
	知能+難聴+肢体	3	0.2
	知能+難聴	29	2.1
	知能+聾+肢体	7	0.5
計		1,104	80.5
肢体	肢体のみ	112	8.2
	肢体+言語	5	0.4
	計	117	8.5
その他	聾	4	0.3
	難聴	56	4.1
	言語	12	0.9
	情緒	10	0.7
	病弱	25	1.9
	自閉	2	0.1
	その他	41	3.0
計		150	10.9
総計		1,371	100

Table 30 地区別・年齢群別重複障害児の実態

年齢	北海道	東北	関東	北陸	東海	近畿	中国	四国	九州	合計
3～5	2	4	35		6	18	3	1	6	75
6～12	36	35	212	25	49	96	45	16	47	561
13～15	28	29	123	15	35	66	17	15	19	347
16～18	14	13	89	10	29	58	17	7	28	265
19～21	2	6	19	4	3	12	3	3	8	60
22～30	1	2	11			7	1	4	7	33
31以上		2	12	2	5	1		2	6	30
合計	83	91	501	56	127	258	86	48	121	1,371
調査対象数	368	565	1,802	325	673	1,218	440	398	878	6,667
百分率	22.6	16.1	27.8	17.2	18.9	21.2	19.6	12.1	13.8	20.6

Table 32 重複障害の種類別・年齢別児童生徒の実態

障害の種類 年齢	知能+								小計	肢体+		小計	聾	難聴	言語	情緒	病弱	自閉	その他	小計	合計
	知の 能み	肢 体	肢 言 体 語	言 語	言 語	難 肢 聴 体	難 聴	難 肢 体		肢 の 体 み	言 語										
3～5	32	19	7	8			2		68	3		3		1	1		1		1	4	75
6～12	302	65	40	68	2		13	2	492	30		30	2	12	3	6	3	1	12	39	561
13～15	185	36	18	41	1	3	7	1	292	25	3	28		8	4	4	3	1	7	27	347
16～18	138	24	4	23	4		6	3	202	29	1	30	2	15	2		4		10	33	265
19～21	22	3	3	3	4			1	36	14		14		4			1		5	10	60
22～30	7	1		1	1				10	4	1	5		5	2		6		5	18	33
31以上	2		1				1		4	7		7		11			7		1	19	30
合計	688	148	73	144	12	3	29	7	1,104	112	5	117	4	56	12	10	25	2	41	150	1,371

(3)重複障害児の視覚障害原因及び眼疾患の部位と症状

重複障害児総数1,371人について、視覚障害の原因別と眼疾患の部位と症状による相関分類をすれば Table 33 のとおりである。

視覚障害原因について見ると、先天要因が~~48.8%~~^{49.0%}で最も高く、次いで中毒は21.7%となっている。中毒に起因する眼疾患の大部分は未熟児網膜症で占められており、291人の21.2%に達している。盲学校在学者6,667人の全体と、重複障害児の1,371人を抽出した場合の両者の視覚障害原因を対比して表示すれば Table 34 のとおりである。両者の比較において注目すべき点は、先天要因が全体では60.5%であるのに対し、重複障害児は~~48.8%~~^{49.0%}、また、中毒は全体では13.7%であるのに対し、重複障害児にあっては21.7%を占めていることである。重複障害児の中に、中毒による未熟児網膜症が高率を占めていることにより、両者の比率に相対的な変動が見られるものと思われる。

次に、眼疾患の部位についても在学者全体と重複障害児を Table 35によって比較してみよう。視束視路疾患において、全体では13.8%であるのに対し、重複障害児では23.7%とかなりの差異が見られるほかは、一般的に特徴的な較差は認められない。

(4)重複障害児の視力及び視力と使用文字

重複障害児1,371人の視力の分布状況は Table 36 のとおりである。視力0は463人33.8%、光覚185人13.5%、手動弁54人3.9%、指数弁32人2.3%で、計734人の54%となっている。それ以上の視力は広範囲に少数ずつ散在しており、重複障害児の視覚障害の程度は重度に集中していることがわかる。ちなみに、盲学校在学者全体の視力程度は I の Table 17 に示したとおりであるが、視力0は19.6%、また、指数弁以下では35.4%である。なお、重複障害児の場合、測定不能が58人の4.2%、不明103人7.5%という回答があった。重複障害児の視力測定は不可能または極めて困難であり、回答のあった視力についてもかなり問題のあるものが含まれているものと思われる。

Table 33 盲学校在学重複障害児童生徒の視覚障害原因（全体）

視覚障害原因 眼疾患の 部位と症状	伝染性疾患				外 傷	中 毒	腫 瘍	全身病				先 天 素 因	原 因 不 明	無 記 入	合 計	百 分 率 %
	麻 疹	梅 毒	脳 膜 炎	そ の 他				栄 養 障 害	ベ ー チ エ ッ ト 病	糖 尿 病	そ の 他					
眼 球 全 体			1	4	4	2	2	1			1	295	47		357	26.0
緑 内 障				1	1							27	3		32	2.3
水 (牛) 眼												25	5		30	2.2
小 眼 球												124			124	9.0
無 眼 球												26	6		32	2.3
無 虹 彩												2	1		3	0.2
虹 彩 欠 損												1			1	0.1
屈 折 異 常			1		2						1	36	13		53	3.9
眼 球 癆				3		2	1	1				16	5		28	2.0
白 子												3			3	0.2
眼 振							1					29	8		38	2.8
そ の 他					1							6	6		13	0.9
角 膜 疾 患								2				27	12		41	3.0
角 膜 軟 化 症																
角 膜 白 斑								1				19	8		28	2.0
そ の 他								1				8	4		13	0.9
水 晶 体 疾 患	1		2	2	2			2				147	17		173	12.6
白 内 障	1		2	2	2			2				145	16		170	12.4
水 晶 体 欠 損												2	1		3	0.2
水 晶 体 亜 脱 臼																
硝 子 体 疾 患			1						2			7	2		12	0.9
ブドウ膜疾患												5	5		10	0.7
網脈絡膜疾患			1	4	291	30				8		87	19		440	32.1
網膜色素変性症												52			52	3.8
黄班部変性症					1							4	2		7	0.5
網脈絡膜萎縮症					1							11	10		22	1.6
未熟児網膜症						291									291	21.2
糖尿病網膜症										7					7	0.5
網膜芽細胞腫							30						1		31	2.3
網膜はく離					1							10	4		16	1.2
全 色 盲												1			1	0.1
そ の 他				1	1							9	2		13	0.9
視 束 視 路 疾 患			24	4	25	5	59				24	103	75	6	325	23.7
視 神 經 萎 縮			21	4	23	5	55				20	85	60	1	274	20.0
視 神 經 欠 損							2					6	2		10	0.7
視 神 經 炎													1		1	0.1
視 中 枢 障 害			3		2		2				4	12	12	5	40	2.9
無記入または不明				1	1						1	1	8	1	13	0.9
合 計	1		28	12	36	298	91	5	2	8	26	672	185	7	1371	100.0
百 分 率 %	0.1		2.0	0.9	2.6	21.7	6.6	0.4	0.2	0.6	1.9	49.0	13.5	0.5	100.0	

注) 無水晶体は白内障を含む。

Table 34 盲学校在学者全体と重複障害児の視覚障害原因の対比

視覚障害原因	全体 (%)	重複 (%)
伝染性疾患	1.2	3.0
外傷	3.3	2.6
中毒	13.7	21.7
腫瘍	5.5	6.6
全身病	4.4	3.1
先天要因	60.5	49.0
原因不明	10.8	13.5
無記入	0.5	0.5

Table 35 盲学校在学者全体と重複障害児の眼疾患の部位の対比

眼疾患の部位	全体 (%)	重複 (%)
眼球全体	29.5	26.0
角膜疾患	3.5	3.0
水晶体疾患	13.9	12.6
硝子体疾患	0.6	0.9
ブドウ膜疾患	2.0	0.7
網脈絡膜疾患	35.9	32.1
視束視路疾患	13.8	23.7
無記入・不明	0.9	0.9

Table 36 重複障害児の視力の分布

視力	人数	百分率 (%)
0	463	33.8
光覚	185	13.5
手動弁	54	3.9
指数弁	32	2.3
0.01	38	2.8
0.02	38	2.8
0.03	47	3.4
0.04	32	2.3
0.05	32	2.3
0.06	31	2.3
0.07	18	1.3
0.08	21	1.5
0.09	17	1.2
0.1	68	5.0
0.12	2	0.2
0.15	19	1.4
0.2	29	2.1
0.25	6	0.4
0.3	32	2.3
0.4	19	1.4
0.5	8	0.6
0.6	5	0.4
0.7	4	0.3
0.8	2	0.2
0.9	1	0.1
1.0	3	0.2
1.2	3	0.2
1.5	1	0.1
測定不能	58	4.2
不明	103	7.5
合計	1,371	100.0

Table 37 重複障害児の視力と使用文字 (6歳以上の全員)

視力	総数	点字	普通文字	両用	その他	記入なし
0	429	183	1		137	108
光覚	174	91		1	56	26
手動弁	52	37	1		5	9
指数弁	31	14	2		12	3
0.01	35	13	8	3	7	4
0.02	36	11	17	5		3
0.03	47	6	26	6	4	5
0.04	31	8	15	1	5	2
0.05	32	3	24	2	2	1
0.06	31	3	25	1	1	1
0.07	18	2	12	2		2
0.08	21		20		1	
0.09	17	1	12	2	1	1
0.1	67	3	53	2	5	4
0.12	2		1	1		
0.15	19	2	14	1		2
0.2	28	1	27			
0.25	6		5	1		
0.3	32		32			
0.4	19		18	1		
0.5	8		8			
0.6	5		5			
0.7	4	1	3			
0.8	2		2			
0.9	1		1			
1.0	3		3			
1.2	3		3			
1.5	1		1			
測定不能	52	1	8		18	25
不明	90	8	4	1	44	33
合計	1,296	388	351	30	298	229
百分率 (%)	100%	29.9%	27.2%	2.3%	23.0%	17.7%

次に、重複障害児の視力と使用文字の関係を見ると Table 37 のとおりである。1,371人中6歳以上の1,296人のうち、点字使用者は388人29.9%、普通文字使用者351人27.2%、点字と普通文字両用者30人2.3%となっているが、その他の298人23.0%や記入無し229人17.7%計527人、40.7%にも及んでいる。これらの対象者の中には、指文字、身振サイン等も含まれているが、大部分は重度・重複のため、文字指導が不可能なものと解されるのである。

3 考 察

盲学校在学者のうち、重複障害児の占める比率は、低年齢ほど大きい。3～5歳の52.1%を最高に、6～12歳（小学部）35.8%、13～15歳（中学部）28.3%は、いずれも未熟児網膜症児の在学との関連が顕著に現われており、また16～18歳の高校年齢層についても前回調査に比較すると6.8%も増加している。地区別の比較では、四国の12.1%から関東の27.8%というようにかなりの較差が見られるが、これは視覚障害原因、在学者の数や年齢等との差異もあるものと思われる。

次に、重複障害の種類についてであるが、Table 31からもわかるように、いわゆる単一・軽度の重複障害は非常に少なく、大部分は知能障害又はその他の障害をいくつも複合する重度・重複である。

以上、今回の調査結果から盲学校重複障害児の実態を見るとき、盲学校における重複障害児教育の拡充・整備についてなお一層の改善が必要であるとともに、国及び地方において教育・福祉・医療の面からの総合的な対策が講じられることの緊要性を痛感させられるのである。

Ⅳ 視覚障害と使用文字との関係

— 1985年・全国盲学校実態調査を中心に —

藤田 千代 大川原 潔 遠藤 勉 藤木 慶子

1 まえがき

我が国の盲学校は、既に110年の歴史を有し、長年にわたり盲児童生徒に対し、主として点字による教育が行われてきた。しかし、近年は弱視児童生徒の在学率が高く、これらの児童生徒の多くは、いわゆる普通文字によって教育が行われている。また、盲学校在学者の中には視力及び眼疾の状態、失明の時期等により、点字と普通文字の両方を使用しているものも相当数見られる。

かつての盲学校といえば、視力保存という思想を背景に、視力を保有する弱視児童生徒に対しても普通文字の使用を禁止し、盲児童生徒と同様に点字によって教育が行われてきたが、昭和30年代後半に入って、特に眼科医学のアプローチもあって、視覚活用の基本に立った弱視教育が発展してきた。そして弱視の特性に応じた文字指導の方法が、各種の視覚補助具（弱視レンズ、拡大読書器等）の開発と相まって急速に進歩してきた。そのためかなりの低視力の児童生徒まで普通文字を使用するようになってきている。

しかし、現在の視力と眼疾及び将来の進行状況等を見通して、個々の児童生徒に最も適した文字指導を行うことは、盲学校教育において最も重要視しなければならない課題の一つである。

本稿は、盲学校における文字指導を進めていくうえでの基礎資料として、全国盲学校児童生徒の視力と使用文字との関係について、その実態を明らかにするとともに、盲教育と弱視教育の対象者を判別し、適正な教育措置がなされるための基礎資料の一つとしてまとめたものである。

なお、本稿をまとめるための調査は、Iで報告の「全国盲学校児童生徒の視覚障害原因とその推移 — 1985年・全国実態調査を中心に」の一環として実施したもので、1970年以降5年毎に行っているものである。

2 調査の方法及び結果

昭和60年度（1985年）における全国72（分校2を含む）の盲学校に在学する全幼児・児童・生徒を対象に、同年7月1日現在で調査した。調査方法としては「視覚障害原因等調査票」を各校にそれぞれ在学者数送付して各個人別に記入を依頼した。調査票の回収状況は総数にして6,687枚であったが、調査票全項目の集計に当たっては、記載事項に問題のある20枚を除いて6,667枚を対象とした。（文部省調査における同年5月1日現在の全国盲学校在学者総数は6,785人である。）

本稿においては、調査票のうち、視力と使用文字に関する部分を中心にまとめたものである。

なお、調査票において視力の項は、左右及び両眼の裸眼視力並びにその矯正視力となっているが、集計に当たっては、矯正可能な場合は矯正視力で、かつ左右または両眼の視力に差異がある場合には、それらのうち最も良い視力の数値を用いた。

以下、全国盲学校在学者の視力及び視力と使用文字との調査結果を記すが、いずれも全体集計及び Table 38 による年齢群別に分類して比較することとした。

(1)盲学校在学者の視力とその分布状態

対象者総数6,667人の視力の程度とその人数の分布状況は、Table 39 のとおりである。視力0の1,304人から視力1.5の10人までとその範囲は広い。測定不能及び不明と報告されたものは、主として視力の測定が困難な重複障害者である。視覚障害の程度を教育的観点から区分してその割合をみると次のとおりである。

盲	視力0.02未満	39.4%	
準盲	視力0.02以上0.04未満	9.4%	
弱視	視力0.04以上0.1未満	18.2%	} 37.9%
		視力0.1以上0.3未満	
	視力0.3以上	10.2%	

視力分布の状況は全体的には1980年の調査と比較して大差はないが、盲に分類される視力0.02未満が39.4%と前回の36.4%より増えている。逆に弱視に分類される視力0.04以上0.3未満の37.9%は前回の41.6%に比較して減少している。

次に、盲学校児童生徒の年齢群別視力の分布を示したのがTable 40である。盲に分類される視力0.02未満では3～5歳が58.3%で最も高く、22～23歳の26.1%と年齢が上昇するにしたがい減少しているが、31歳以上では36.9%と再び増加している。また、視力0.3以上の軽度では、3～

Table 38 盲学校児童生徒の年齢群別分布

年齢群	人数	百分率(%)
3～5	144	2.2
6～12	1,567	23.5
13～15	1,226	18.4
16～18	1,392	20.9
19～21	976	14.6
22～30	533	8.0
31以上	822	12.3
不明	7	0.1
合計	6,667	100.0

Table 39 盲学校児童生徒の視力程度

視力	人数	百分率(%)
0	1,304	19.6
光覚	582	8.7
手動弁	290	4.4
指数弁	182	2.7
0.01	270	4.1
0.02	333	5.0
0.03	292	4.4
0.04	284	4.3
0.05	216	3.2
0.06	236	3.5
0.07	170	2.6
0.08	182	2.7
0.09	125	1.9
0.1	573	8.6
0.12	35	0.5
0.15	244	3.7
0.2	399	6.0
0.2	65	1.0
0.3	308	4.6
0.4	135	2.0
0.5	70	1.1
0.6	56	0.8
0.7	28	0.4
0.8	23	0.3
0.9	11	0.2
1.0	22	0.3
1.2	16	0.2
1.5	10	0.2
測定不能	64	1.0
不明	142	2.0
合計	6,667	100.0

Table 40 盲学校児童生徒の年齢群別視力の分布

視力	3～5	6～12	13～15	16～18	19～21	22～30	31以上
0.02未満	58.3	49.9	46.2	34.2	27.8	26.1	36.9
0.02以上0.04未満	4.2	7.3	7.6	8.8	8.7	13.1	16.2
0.04以上0.1未満	7.6	14.9	17.5	21.5	20.4	18.6	18.9
0.1以上0.3未満	6.3	15.5	18.4	22.2	24.5	24.8	19.1
0.3以上	2.1	5.7	8.2	12.0	17.0	15.9	8.3
測定不能・不明	21.5	6.7	2.0	1.3	1.5	1.5	0.7

5歳の2.1%から年齢が上昇するにつれて増えており、22～30歳で15.9%となっているが、31歳以上になると8.3%と逆に半減しているのが特徴的である。

(2)視力と使用文字との関係

ア. 点字・普通文字使用者の視力分布

6歳以上の対象者6,523名（3～5歳の幼稚部相当の年齢群については集計から除外する）に

Table 41 盲学校児童生徒の使用文字（6歳以上の全体）

視力	総数	点字	普通文字	両用	その他	記入なし
0	1,251	976			143	132
光覚	560	464	3	1	59	33
手動弁	287	255	11		8	13
指数弁	181	132	23	8	12	6
0.01	265	149	77	23	7	9
0.02	330	133	148	41	1	7
0.03	289	84	143	51	3	8
0.04	280	68	183	18	4	7
0.05	214	35	157	17	2	3
0.06	234	31	176	19	1	7
0.07	169	17	134	13		5
0.08	180	13	154	10	1	2
0.09	125	6	106	10	1	2
0.1	572	25	512	17	5	13
0.12	34	2	28	2		2
0.15	242	5	217	14		6
0.2	394	10	368	5	1	10
0.25	65		63	2		
0.3	307	1	301	1		4
0.4	134	2	128	2		2
0.5	70	1	69			
0.6	56	1	54	1		
0.7	28		27			1
0.8	22		22			
0.9	11		10			1
1.0	22		22			
1.2	16		16			
1.5	10		9			1
測定不能	53	3	9		21	20
不明	122	19	19	1	43	40
合計	6,523	2,432	3,189	256	312	334

Table 42 盲学校児童生徒の使用文字（6歳～12歳）

視力	総数	点字	普通文字	両用	その他	記入なし
0	438	286			91	61
光覚	188	137	2	1	31	17
手動弁	65	51	4	5	4	6
指数弁	48	35	4	6	7	2
0.01	43	22	8	15	5	3
0.02	50	21	20	6	1	2
0.03	64	18	28	7	2	1
0.04	53	11	28	5	4	4
0.05	43	9	25	5	1	1
0.06	49	8	34	1		2
0.07	38	6	26	2		1
0.08	28	3	24	1		
0.09	23		19		1	1
0.1	100	24	65	2	3	7
0.12	9	1	7			1
0.15	53		50			1
0.2	66	15	47		1	3
0.25	15		15			
0.3	36		36			
0.4	16		16			
0.5	12	1	11			
0.6	10		10			
0.7	3		3			
0.8	3		3			
0.9	2		2			
1.0	3		3			
1.2	2		2			
1.5	2		2			
測定不能	32	3	8		12	9
不明	73	10	6		33	24
合計	1,567	661	508	56	196	146

Table 46 視力と年齢群別点字・普通文字使用者の比率(%)

年齢群 視力	6～12			13～15			16～18			19～21			22～30			31以上		
	点字	普通	両用	点字	普通	両用	点字	普通	両用	点字	普通	両用	点字	普通	両用	点字	普通	両用
手動弁	92.7	7.3		97.1	2.9		96.0	4.0		96.0	4.0					96.4	3.6	
指数弁	89.7	10.3		85.7	9.5	4.8	81.3	9.4	9.4	93.8		6.2	73.3	20.0	6.6	65.9	26.8	7.3
0.01	62.9	22.7	14.3	67.7	19.4	12.9	78.9	18.4	2.6	63.9	27.8	8.3	50.0	35.0	15.0	48.3	44.8	6.9
0.02	44.7	42.6	12.8	44.4	33.3	22.2	38.6	40.1	21.1	52.1	39.6	8.3	43.6	53.8	2.6	30.3	61.8	7.9
0.03	29.5	45.9	24.6	34.3	45.7	20.0	32.3	50.0	17.7	40.0	48.6	11.4	23.3	63.3	13.3	25.5	56.4	18.2
0.04	24.4	62.2	13.3	27.5	66.7	5.9	27.1	67.8	5.1	23.1	69.2	7.7	25.9	74.1		22.9	70.8	6.3
0.05	22.0	61.0	17.1	30.6	63.9	5.6	17.3	73.1	9.6	15.8	78.9	7.9	6.7	93.3		15.4	80.8	3.8

Table 47 境界視力域の推移

年次	両曲線の交差部位	
1970	視力	0.02～0.03
1975	”	0.02～0.03
1980	”	0.02
1985	”	0.01～0.02

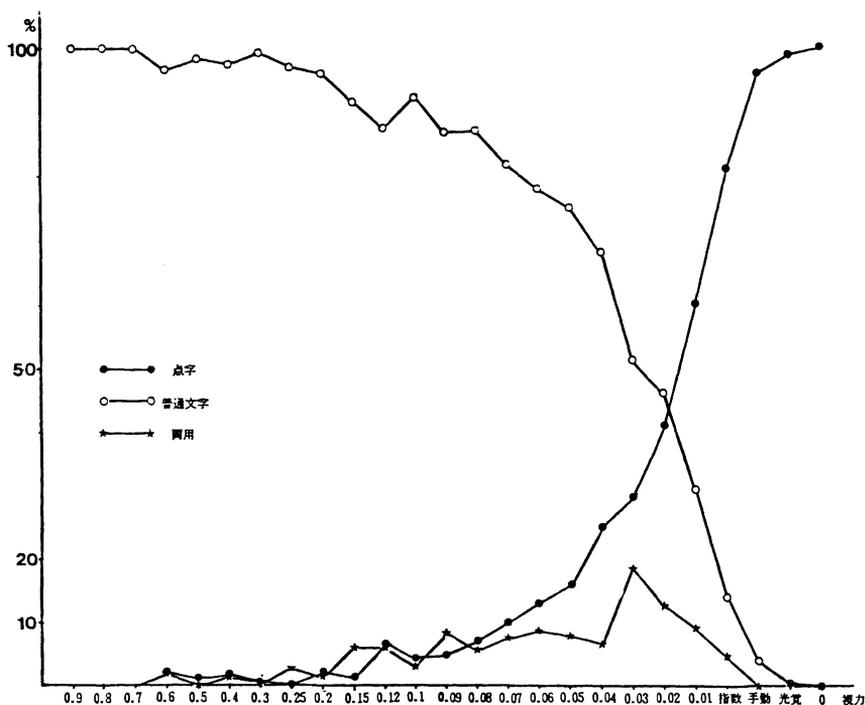


Fig. 6 盲学校児童生徒の視力と使用文字の関係(全体)

Table 40 盲学校児童生徒の年齢群別視力の分布

視力	年齢群	3～5	6～12	13～15	16～18	19～21	22～30	31以上
0.02未満		58.3	49.9	46.2	34.2	27.8	26.1	36.9
0.02以上0.04未満		4.2	7.3	7.6	8.8	8.7	13.1	16.2
0.04以上0.1未満		7.6	14.9	17.5	21.5	20.4	18.6	18.9
0.1以上0.3未満		6.3	15.5	18.4	22.2	24.5	24.8	19.1
0.3以上		2.1	5.7	8.2	12.0	17.0	15.9	8.3
測定不能・不明		21.5	6.7	2.0	1.3	1.5	1.5	0.7

5歳の2.1%から年齢が上昇するにつれて増えており、22～30歳で15.9%となっているが、31歳以上になると8.3%と逆に半減しているのが特徴的である。

(2)視力と使用文字との関係

ア. 点字・普通文字使用者の視力分布

6歳以上の対象者6,523名(3～5歳の幼稚部相当の年齢群については集計から除外する)に

Table 41 盲学校児童生徒の使用文字
(6歳以上の全体)

視力	総数	点字	普通文字	両用	その他	記入なし
0	1,251	976			143	132
光覚	560	464	3	1	59	33
手動弁	287	255	11		8	13
指数弁	181	132	23	8	12	6
0.01	265	149	77	23	7	9
0.02	330	133	148	41	1	7
0.03	289	84	143	51	3	8
0.04	280	68	183	18	4	7
0.05	214	35	157	17	2	3
0.06	234	31	176	19	1	7
0.07	169	17	134	13		5
0.08	180	13	154	10	1	2
0.09	125	6	106	10	1	2
0.1	572	25	512	17	5	13
0.12	34	2	28	2		2
0.15	242	5	217	14		6
0.2	394	10	368	5	1	10
0.25	65		63	2		
0.3	307	1	301	1		4
0.4	134	2	128	2		2
0.5	70	1	69			
0.6	56	1	54	1		
0.7	28		27			1
0.8	22		22			
0.9	11		10			1
1.0	22		22			
1.2	16		16			
1.5	10		9			1
測定不能	53	3	9		21	20
不明	122	19	19	1	43	40
合計	6,523	2,432	3,189	256	312	334

Table 42 盲学校児童生徒の使用文字(6歳～12歳)

視力	総数	点字	普通文字	両用	その他	記入なし
0	438	286			91	61
光覚	188	137	2	1	31	17
手動弁	65	51	4	5	4	6
指数弁	48	35	4	6	7	2
0.01	43	22	8	15	5	3
0.02	50	21	20	6	1	2
0.03	64	18	28	7	2	1
0.04	53	11	28	5	4	4
0.05	43	9	25	5	1	1
0.06	49	8	34	1		2
0.07	38	6	26	2		1
0.08	28	3	24	1		
0.09	23		19		1	1
0.1	100	24	65	2	3	7
0.12	9	1	7			1
0.15	53		50			1
0.2	66	15	47		1	3
0.25	15		15			
0.3	36		36			
0.4	16		16			
0.5	12	1	11			
0.6	10		10			
0.7	3		3			
0.8	3		3			
0.9	2		2			
1.0	3		3			
1.2	2		2			
1.5	2		2			
測定不能	32	3	8		12	9
不明	73	10	6		33	24
合計	1,567	661	508	56	196	146

ついて集計分類し、その結果を Table 41 に示した。更に全体の中から 6～12歳の小学校相当の年齢群と13～15歳の中学校相当の年齢群を分類して、その特徴を比較するためにそれぞれ Table 42, Table 43 に示した。

イ. 視力と使用文字との比較

使用文字等に対する質問に対して、無記入が全体で334人、その他の項については312人で全体の9.9%を占めた。また、その他の項に分類されたものは、「文字指導不可能等」と記入されていた重複障害者である。この2項目の646人を除いた総数5,877名についての視力と使用文字別（点字・普通文字・両用）使用者の数を全体に対する比率で表わした。

また、6～12歳と13～15歳の学齢相当の年齢群別についても、無記入とその他の2項目の人数を除きその比率を示した。(Table 44)

この Table 44 からわかるように、点字を使用している者は全体の41.4%、普通文字を使用している者54.3%。また、点字と普通文字を両用している者

は4.4%となっている。年齢群別から使用文字の比率を比較して見ると Table 45 のとおりである。6～12歳と13～15歳の年齢群では、点字を使用している者が多く、16～18歳からの高年齢群では、普通文字使用者が多い。両用では年齢群別にあまり差は見られないが、31歳以上の5.4%が最も高い数値である。

ウ. 視力段階別使用文字

Table 44 から視力段階別での使用文字の関係を見ると、視力0.02～0.05の間で点字使用者と普通文字使用者の比率が接近していることがわかる。即ち、視力0.02では点字使用者が41.3%、普通文字使用者が46.0%、また、両方使いわけているものが12.7%である。

視力0.03では点字使用者が30.2%、普通文字使用者が51.4%となり点字使用者よりも高い数値を占めている。なお、この視力段階では両方使い分けている者も多く18.4%と両用者では最も高い数値である。明らかに点字使用を適当とする視力「指数弁」の者で普通文字と回答されている者が14.1%、視力0.01%で30.9%と過去の調査に比較して高い比率を示しているのが注目される。これらの視力と使用文字の関係を百分率曲線で表わしたのが Fig. 6 である。点字と普通文字との両曲線が交差しているのは、視力段階で見ると視力0.01～0.02の間に位置している。前回までの調査では、両曲線の交差点は視力0.02～0.03である。特に1980年調査では視力0.02のところで

Table 43 盲学校児童生徒の使用文字(13歳～15歳)

視力	総数	点字	普通文字	両用	その他	記入なし
0	280	205			34	41
光覚	152	122	1		15	14
手動弁	76	68	2		2	4
指数弁	26	18	2	1	3	2
0.01	33	21	6	4		2
0.02	55	24	18	12		1
0.03	38	12	16	7		3
0.04	51	14	34	3		
0.05	36	11	23	2		
0.06	41	4	31	3	1	2
0.07	30	3	25	2		
0.08	31	4	26	1		
0.09	26	1	21	3		1
0.1	105	6	94	3	1	1
0.12	3		2			1
0.15	43	1	37	4		1
0.2	64	2	58	3		1
0.25	10		9	1		
0.3	47	1	46			
0.4	23		23			
0.5	9		9			
0.6	7		7			
0.7	2		2			
0.8	4		4			
0.9	2		2			
1.0	3		3			
1.2	3		3			
1.5						
測定不能	10				3	7
不明	15	2			6	7
合計	1,226	519	505	49	65	88

Table 44 盲学校児童生徒の視力別点字・普通文字使用者の比率(%)

視力	6歳以上の全体			6歳～12歳			13歳～15歳		
	点字	普通文字	両用	点字	普通文字	両用	点字	普通文字	両用
0	100			100			100		
光覚	99.2	0.6	0.2	97.9	1.4	0.7	99.2	0.8	
手動弁	95.9	4.1		92.7	7.3		97.1	2.9	
指数弁	81.0	14.1	4.9	89.7	10.3		85.7	9.5	4.8
0.01	59.8	30.9	9.2	62.9	22.7	14.3	67.7	19.4	12.9
0.02	41.3	46.0	12.7	44.7	42.6	12.8	44.4	33.3	22.2
0.03	30.2	51.4	18.4	29.5	45.9	24.6	34.3	45.7	20.0
0.04	25.3	68.0	6.7	24.4	62.2	13.3	27.5	66.7	5.9
0.05	16.8	75.1	8.1	22.0	61.0	17.1	30.6	63.9	5.6
0.06	13.7	77.9	8.4	17.0	72.3	10.6	10.5	81.6	7.9
0.07	10.4	81.7	7.9	16.2	70.3	13.5	10.0	83.3	6.7
0.08	7.3	87.0	5.7	10.7	85.7	3.6	12.9	83.9	3.2
0.09	4.9	86.9	8.2		90.5	9.5	4.0	84.0	12.0
0.1	4.5	92.4	3.1	26.7	72.2	1.1	5.8	91.3	2.9
0.12	6.3	87.5	6.3	12.5	87.5			100.0	
0.15	2.1	92.0	5.9		96.2	3.9	2.4	88.1	9.5
0.2	2.6	96.1	1.3	24.2	75.0		3.2	92.1	4.8
0.25		96.9	3.1		100.0			90.0	10.0
0.3	0.3	99.3	0.3		100.0		2.1	97.9	
0.4	1.5	97.0	1.5		100.0			100.0	
0.5	1.4	98.6		8.3	91.7			100.0	
0.6	1.8	96.4	1.8		100.0			100.0	
0.7		100.0			100.0			100.0	
0.8		100.0			100.0			100.0	
0.9		100.0			100.0			100.0	
1.0		100.0			100.0			100.0	
1.2		100.0			100.0			100.0	
1.5		100.0			100.0			100.0	
測定不能	25.0	75.0		27.3	72.7				
不明	48.7	48.7	2.6	62.5	37.5				
合計	41.4	54.3	4.4	54.0	41.5	4.6	48.6	47.1	4.6

Table 45 年齢別点字・普通文字使用者の比率(%)

年齢群	点字	普通文字	両用
6歳以上の全体	41.4	54.3	4.4
6 - 12	54.0	41.5	4.6
13 - 15	48.6	47.1	4.6
16 - 18	38.2	57.4	4.4
19 - 21	33.8	62.8	3.4
22 - 30	31.3	65.3	3.5
31歳以上	38.5	56.3	5.4

Table 46 視力と年齢群別点字・普通文字使用者の比率(%)

視力	6～12			13～15			16～18			19～21			22～30			31以上		
	点字	普通	両用	点字	普通	両用	点字	普通	両用	点字	普通	両用	点字	普通	両用	点字	普通	両用
手動弁	92.7	7.3		97.1	2.9		96.0	4.0		96.0	4.0					96.4	3.6	
指数弁	89.7	10.3		85.7	9.5	4.8	81.3	9.4	9.4	93.8		6.2	73.3	20.0	6.6	65.9	26.8	7.3
0.01	62.9	22.7	14.3	67.7	19.4	12.9	78.9	18.4	2.6	63.9	27.8	8.3	50.0	35.0	15.0	48.3	44.8	6.9
0.02	44.7	42.6	12.8	44.4	33.3	22.2	38.6	40.1	21.1	52.1	39.6	8.3	43.6	53.8	2.6	30.3	61.8	7.9
0.03	29.5	45.9	24.6	34.3	45.7	20.0	32.3	50.0	17.7	40.0	48.6	11.4	23.3	63.3	13.3	25.5	56.4	18.2
0.04	24.4	62.2	13.3	27.5	66.7	5.9	27.1	67.8	5.1	23.1	69.2	7.7	25.9	74.1		22.9	70.8	6.3
0.05	22.0	61.0	17.1	30.6	63.9	5.6	17.3	73.1	9.6	15.8	78.9	7.9	6.7	93.3		15.4	80.8	3.8

Table 47 境界視力域の推移

年次	両曲線の交差部位	
1970	視力	0.02～0.03
1975	”	0.02～0.03
1980	”	0.02
1985	”	0.01～0.02

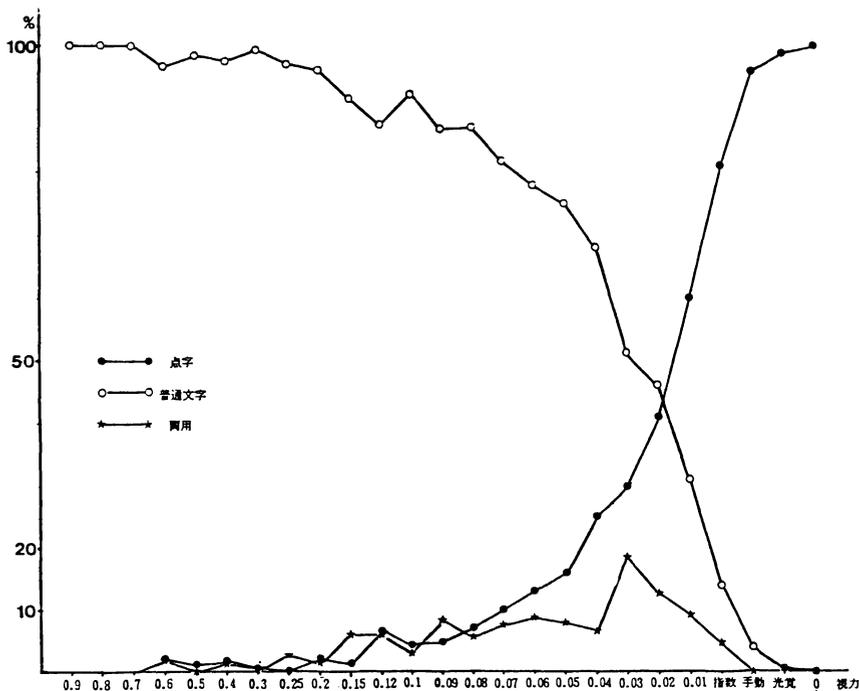


Fig. 6 盲学校児童生徒の視力と使用文字の関係(全体)

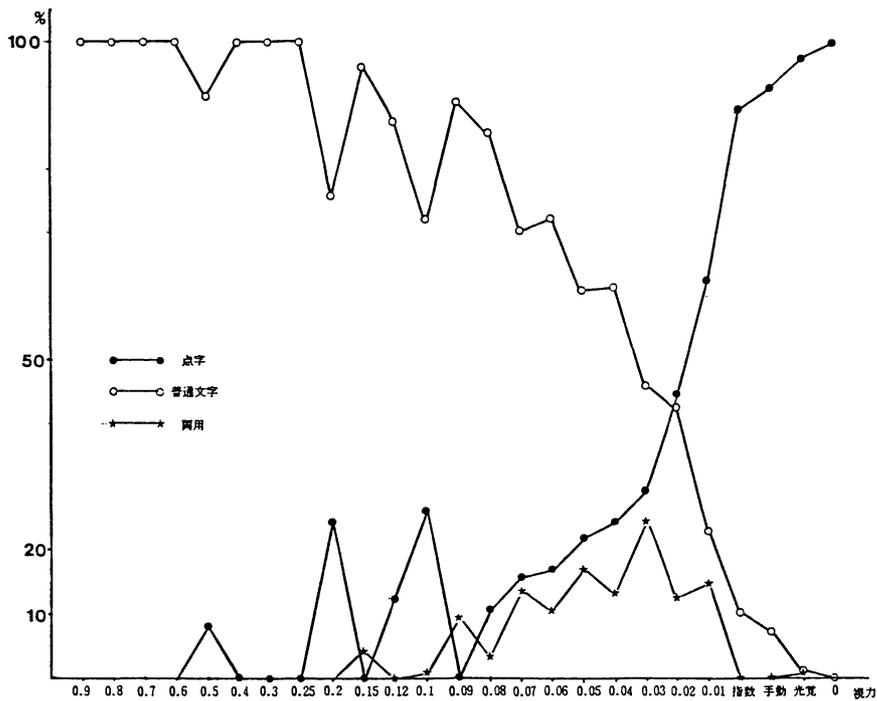


Fig. 7 盲学校児童生徒の視力と使用文字の関係（6歳～12歳）

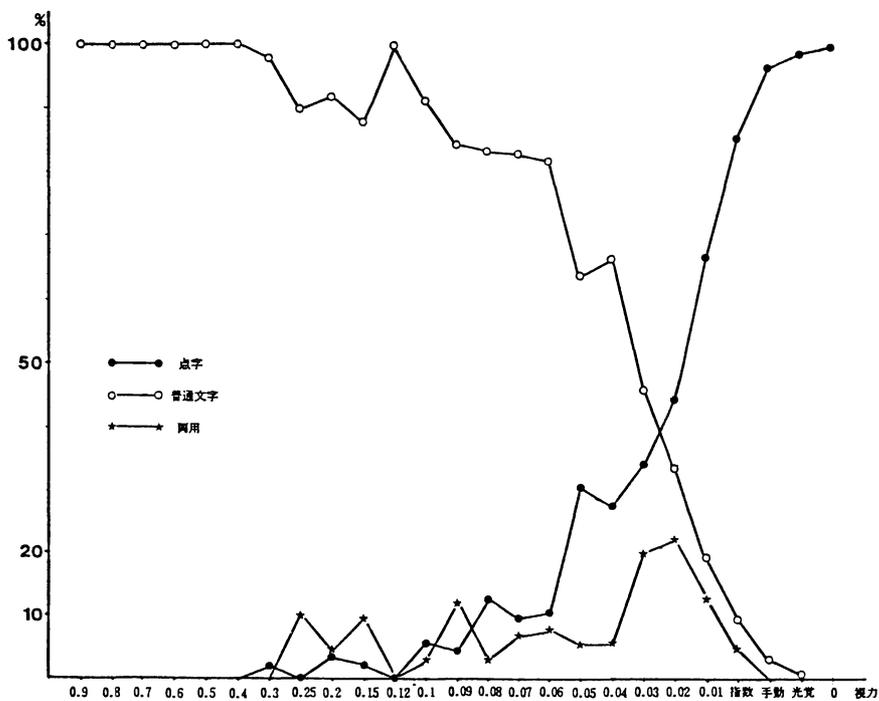


Fig. 8 盲学校児童生徒の視力と使用文字の関係（13歳～15歳）

交差していたが、今回は更にその交差点が低視力の方向に移動していることがわかる。両用については、視力0.03が最高値を示している。

年齢群別では、6～12歳及び13～15歳の視力と使用文字の関係をそれぞれ百分率曲線で表わしたのが Fig. 7 と Fig. 8 である。6～12歳の年齢群では、点字使用者54%、普通文字使用者41.5%、両用者4.6%で、この年齢群では点字使用者の方が多い。しかし、少数ではあるが、普通文字使用者が「光覚」で1.4%、「手動弁」で7.3%いるという実態である。前回の調査ではこの視力段階での普通文字使用者は皆無であった。また、視力0.02では点字使用44.7%普通文字使用者42.6%、視力0.03で点字使用者29.5%、普通文字使用者が45.9%である。点字と普通文字の両曲線の交差点は、視力段階で視力0.02に位置している。両用者は視力0.03で24.6%と最も高く、次いで視力0.05で17.1%、視力0.01で14.3%である。1980年の6～12歳の年齢群と比較すると、点字使用と普通文字使用の両曲線の交差点がわずかに低視力の方に移行していることがわかる。

次に、点字と普通文字両用者では、前回は視力0.02に高い数値を占めていたが、今回は視力0.03に移行している。また、今回は視力0.1と視力0.2に変動が見られる。点字使用者が視力0.1で26.7%、視力0.2で24.2%と高い数値である。

これは視覚活用の個人差や補助具の使用及び眼疾患の違い、その他いろいろな要素がからんで学習方法上判別が困難なことの一面の現れではないかと考えられる。13～15歳の年齢群では点字使用者が48.6%、普通文字使用者47.1%、両用者4.6%である。また、視力0.02で点字使用者44.4%、普通文字使用者33.3%、視力0.03では点字使用者34.3%、普通文字使用者45.7%で両曲線の交差するところは視力0.02と0.03の間である。両用者で高い数値を示しているのは視力0.02の22.2%である。

この年齢群になると小学校相当の年齢群に見られるように、視力0.1や視力0.2で特に大きな変動は認められず安定した状態にあると考えられる。16～18歳、19～21歳、22～30歳及び31歳以上の年齢群では、年齢上昇につれて点字と普通文字との両曲線に変化が見られ、その交差する位置も多少の相違が見られる。(Table 46)

3 考 察

盲学校在学者の視力と使用文字との関係は従来調査結果においては、点字と普通文字使用の境界視力域は、Table 47 に示すとおり、視力0.02～0.03にはぼ定着していた。それが今回の調査結果では、その境界視力域は視力0.01～0.02と低視力方向に移行している。このことは年齢群別表 (Table 46) から考察すると、高年齢者の中に非常に低視力であるにもかかわらずその視力に依存し続けている者が相当数いることによる。これは、中途失明者の場合、視覚障害が重度に

Table 48 年齢群別境界視力域

年齢群	両曲線の交差部位
6～12	視力 0.02
13～15	" 0.02～0.03
16～18	" 0.02
19～21	" 0.02～0.03
22～30	" 0.01～0.02
30以上	" 0.01～0.02

進行していても完全に視力を失うまで、普通文字に執着して点字に切換えることが困難であるため、極端に大きな太字を使ってでも普通文字を使用していることなどによる。

年齢群別に点字と普通文字使用の境界視力を見ると Table 48 のとおりである。この表からもわかるように高年齢者を除けば、点字と普通文字の境界視力域は0.02~0.03に定着していることがうかがわれる。

また、6~12歳の年齢群（小学校相当）で、視力0.1と0.2の者で点字使用者が増加している。本来この程度の視力であれば普通文字の使用はそう問題ではないと考えられるが、これは個々の児童生徒の視機能の状態及び今後の予測、あるいは重複障害等によるものと思われる。

この結果から視覚障害児の教育上の判別基準として視力0.01以下は点字、視力0.02~0.03は境界視力域、視力0.04以上は普通文字使用可能な視力とする信頼性を強めた。しかし、実際にはかなり低視力であっても普通文字を使用している者や普通文字使用の可能な視力でも点字を使用しているものもいるという事実は見逃がせない。

付 録

全国盲学校及び小・中学校弱視学級 児童生徒の視覚障害原因等調査要項

1 調査の趣旨

この調査は、わが国における視覚障害教育の改善向上に資するとともに、国際的に関連する失明予防等に関する基礎資料を得るため、関係機関の協力を得て5年毎に実施するものである。

2 調査実施機関

筑波大学学校教育部（心身障害教育研究分野視覚障害教育研究室）

3 調査の対象

- (1) 全国盲学校の全幼児・児童・生徒
- (2) 小・中学校弱視学級の全児童・生徒

4 調査時期

昭和60年7月1日現在

5 調査担当者

調査実施機関

大川原 潔	筑波大学教授	学校教育部
藤 田 千 代	筑波大学助手	学校教育部
遠 藤 勉	筑波大学学校教育部研究生	
斉 藤 元 秀	筑波大学学校教育部研究生	

調査協力関係者（五十音順）

植 村 恭 夫	慶応義塾大学教授	医学部
大 山 信 郎	東京教育大学名誉教授	
海 藤 弘	全日本盲学校教育研究会長	
香 川 邦 生	文部省初等中等教育局特殊教育課教科調査官	
久保田 伸 枝	帝京大学教授	医学部
湖 崎 克	大阪市立小児保護センター所長	
佐 藤 恒	全国盲学校校長会長	
谷 村 裕	筑波大学教授	心身障害学系
田 辺 歌 子	順天堂大学医学部眼科学教室	
中 島 章	順天堂大学教授	医学部
原 田 政 美	東京都心身障害者福祉センター所長・帝京大学教授	
藤 木 慶 子	順天堂大学医学部眼科学教室	
丸 尾 敏 夫	帝京大学教授	医学部

6 調査結果の報告

調査結果については、できるだけ早期にまとめて、調査対象校及び関係各方面に送付する。

7 報告書の概要（予定）

1980年の調査（別添）にならない、全国盲学校及び小・中学校児童生徒の、①視覚障害の原因及び疾患、②視力及び視力と使用文字との関係、③重複障害の実態等について、年齢別、地域

別に分類するとともに、更に、これまでの調査資料との比較において児童生徒の実態とその変化しつつある状況を分析して、これからの施策や教育内容・方法の改善に資するための資料としてまとめる。

昭和60年 6月27日

各盲学校長殿

筑波大学 学校教育部
視覚障害教育研究室
教授 大川原 潔

全国盲学校児童生徒の視覚障害原因等調査
(全国盲学校長会協力) についてのお願い

謹啓、時下ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。かねて当研究室の研究活動に対しましては何かとご高配たまわり深く感謝申し上げます。

さて、このたび当研究室の継続研究の一つとして5年毎に行う標記調査を実施することになりました。この調査は毎回全国盲学校長会の格別のご協力をいただいで実施してまいりましたが、今回につきましても、6月26日の全国盲学校長会総会において全面的にご協力いただけることが決まり、深く感謝申し上げます。

既にご承知のことと存じますが、わが国における盲学校在籍者の視覚障害原因の調査は1910年以降今回に至るまで、その実施機関は異にいたしますが継続的に行われ、教育施策や教育方法等の改善に資してきました。特に1952年以降においては日本眼衛生協会、順天堂大学医学部眼科学教室並びに文部省近親婚調査班等による全国調査が国際基準によって行われてまいりましたが、種々の事情から1964年度の調査以降は、その実施に困難が予想されてきました。しかしながら、この種の調査は、5年ごとに世界各国で統計し報告し合って相互に比較して失明防止対策等に資するのが通例となっておりますので、1970年以降の調査は各関係者の要請と協力により、当研究室(当時は旧東京教育大学教育学部リハビリテーション教育研究施設)が実施し、国際的に関連する事業を引き継ぐことになりました。おかげで、毎回全国盲学校から絶大なるご協力を得て、すべての盲学校から貴重な資料を回収(100%)させていただいております。

なお、今回の調査は前回同様に、視覚障害原因のほか、視力と使用文字との関係及び重複障害の実態を詳細に分析したいと思っております。

学期末で何かとご多用のところ甚だ恐縮に存じますが、何卒ご協力くださいますようお願い申し上げます。

調査結果につきましてはできるだけ短期間に集計・分析のうえ、早い時期に各校あてご報告申し上げます。敬具

記

- 1 調査の時期 昭和60年7月1日現在
- 2 調査用紙のご返送 昭和60年7月末日までをお願いします。

送付先：〒112 東京都文京区大塚3-29-1

筑波大学学校教育部 大川原 潔 宛

☎03-941-1675

- 3 調査対象 貴校に在籍する全幼児・児童・生徒
- 4 送付資料 (1)調査用紙 枚
(2)返送用封筒・切手
(3)前回調査結果の報告書

昭和60年6月27日

弱視学級を置く各小・中学校長殿

筑波大学 学校教育部
視覚障害教育研究室
教授 大川原 潔

全国小・中学校弱視学級児童・生徒の視覚障害原因等調査についてのお願い

謹啓、時下ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。

さて、このたび当研究室では関係機関との提携協力の下に5年毎に実施する標記の調査を下記により行うことになりました。

わが国における視覚障害教育対象者の視覚障害原因等調査は、既に1910年から各種の機関によって実施され、この教育の発展に資してきましたが、1952年以降はほぼ5年毎に行われ教育内容・方法の改善と教育施策に資しております。特に今回の調査に当っては、前回同様に視覚障害原因・疾患のほか、視力の程度、使用文字及び重複障害の実態を年齢別、地域別に分類し、更にこれまでの種々の資料との比較において弱視学級児童生徒の実態とその動向を分析したいと思っております。

学期末で何かとご多用のところ甚だ恐縮に存じますが、何卒ご協力くださいますようお願い申し上げます。

調査結果につきましては、できるだけ短期間にまとめて早い時期にご報告申し上げる予定であります。

敬具

記

- 1 調査1 視覚障害原因等調査（弱視学級で指導を受けている全児童・生徒を対象）
調査2 全国小・中学校弱視学級実態調査
- 2 調査期間 昭和60年7月1日現在
- 3 返 送 昭和60年7月末日までに下記にご返送願います。
〒112 東京都文京区大塚3-29-1
筑波大学学校教育部 大川原 潔 宛
- 4 送付資料
(1)視覚障害原因等調査票 枚（児童生徒数分）
(2)弱視学級実態調査 1枚（学級単位）
(3)返信用封筒・切手

(4)1980年調査結果の報告書 1冊

(5)昭和59年度全国小・中学校弱視学級実態調査結果 1枚

昭和60年6月27日

各盲学校長殿

全国盲学校長会
会長 佐藤 恒

全国盲学校児童生徒の視覚障害原因等調査に対する協力依頼について

このたび筑波大学学校教育部視覚障害教育研究室（大川原潔教授）においては、関係機関との提携協力の下に、標記の調査を実施することになりました。

既にご承知のこととは思いますが、この調査は昭和27年以降いろいろな機関によってほぼ5年毎に行われてきましたが、その調査結果は常に我が国視覚障害教育発展のための重要な資料として活用されております。そこで、毎回の調査実施に当たっては、全国盲学校長会としても全面的に協力してまいりました。今回の調査実施に際しましても去る6月26日～27日開催の全国盲学校長会総会において、その意義を認めて、この調査に協力することになりました。ついては、学期末でなにかとご多用のこととは存じますが、前回同様に各校漏れなくこの調査にご協力下さいますよう、よろしくお願い申し上げます。

なお、特に今回の調査においては、前回同様に視覚障害の原因・疾患のほか、視力及び視力と使用文字との関係や重複障害の実態等について、年齢別、地域別に分類し、更にこれまでの種々の資料との比較において、盲学校在籍者の実態とその動向が的確に分析されることになっておりますので、これからの盲学校教育を考えていく上で貴重な資料として活用できることを期待しております。

